女鑑

明治二十八年十一月五日發行

第九十七號

東京國光社

女鑑第九拾七號

目録

貞正院



女鑑 第九十七號

家庭の樂

世の中は、名譽の戰場なり。又、利欲の戰場なり。優者は勝ち、劣者は敗れ、適する者は存し、適せざる者は亡ぶ。外には、もろ〳〵の外國人と競爭せざるべからざるに、内には、道義を外にして、私利のみ營むやからもありて、權謀も行はれ、術數も行はれ、動めすれば、財產を失ひ、名譽を失ひ、生命までも失はむとす。されば、此世に處して、義を守り、道を行ひて、國民たるべき務をつくさむにはかたく身を持し、氣を張りて、以てもろ〳〵の障害に打勝たざるべからず。心をいため、身を勞すること、いくばくぞや。

浮世は憂世なり。されど、歸て家に至れば、僮僕、門に迎へ、妻子軒に迎ふ。一卓の肴、以て共に食すべく、一瓶の酒、以て共に醉ふべし。一家團欒の樂、何ぞ其れ融々たるや。

親は泣き寄りとは、よくも穿てるかな。賴山陽が「閲世始知骨肉親」といへるも、

偶然にあらず。よしや、社會はつらく、苦しく、誠なく、道なく、僞り多きも、家庭は安樂に、平和に、よろづ誠心あふれて、絶えて僞なし。社會は、腹に劍をかくして、口に蜜をふくめり。家庭は、裡に慈悲の涙をたゝへて、表には叱りつ、いさめつ、一に誠の道にかなはむことを期す。朝の刎頸の友、夕に仇敵となるは、社會の常なり。絶ゑず苦樂を共にして、生死相渝はらざるものは家庭の常なり。ことに、父母、堂にありて、すこやかに、兒女、膝をめぐりて、つゝがなく、夫唱へ、婦和しこ、一家よく治まるにいたりては、その樂また何物か之に加へむ。

唯其れ社會は名譽の戰場なり。故に、何事も他に一籌を輸すべからず。失敗を取れば一生の耻辱となることあらむ。家庭や則ち然らず。負けて反て樂しきことあり。骨牌、トランプの如き、鬚眉の丈夫が三尺の小兒に負けても、耻ぢにならず、腹もたゝず。何事も氣を張ることなくして、笑聲、常に洋々たり。

唯其れ社會は利欲の戰場なり。故に利のある處は、肝膽相許すも、利のなき處は、秦越の間も啻ならず。何事も僞りがちにて、妄りに信用すべからず。家庭や則ち然らず。家庭には唯情ありて、僞なく、利欲もなく、表面を塗抹することなくして、直

に精神を吐露す。時に兒童の我儘なることあれば、威嚴を以て之を制すれど、其の心には必ず慈悲の涙あり撫づるも、叱るも、一に親の愛に外ならざるなり。社會は、かく苦惱多きものなり。而して君の爲め、國の爲め、臣民たる分を盡さむには、此の社會に立たざるべからず。樂只なる家庭の、之を慰め、之をいたはるにあらざれば、安んぞ能く長く社會の苦難に打ち勝つことを得んや。車輪、轉ずること、久しきに及べば、相軋りて運動十分ならざるも、油を注げば更によく廻轉するに至る。家庭はそれ人生の油乎。

もし夫れ、姑と嫁と相鬩ぎ、妻、夫を侮り、幾多の兒女も、我儘になりて、親の命を奉ぜず、口說常に絶えず、風波常に起るに至らば、家庭も亦、苦境なり外も苦しく、內も亦苦し。かゝる家庭を有するもの、いかでかよく活潑にして出で、十分に國家に盡くすを得んや、かゝる家庭の主人公は必ずや、其の色青く、頬殺け、眼落ち、常に思ふ所あるが如く、擧止快活ならず、容貌憔悴して、累々として喪家の犬の如き看あらむ。嗚呼またあはれならずや。

かく家內の不和を來すものは、其責主として一家の細君にあり。舅姑頑なるも、な

んぞ子の子たる心を以て事へざる。夫にさゝげては、まさに眉と齊しくすべし。子を敎ふるには、三遷の勞も辭すべからず。家庭は畢竟、細君の心次第にて治りもすれば、また、亂れもするなり。而して、家庭の社會に關係すること實に大なるものなり。世の女子たる者、心せよ。



新聞小說

水本青蘿

隱居屋の婆樣にも、新聞の御用ある者は、小說あれども也。小間遣の小娘も昨日の新聞を拜借する者は、小說あれども也。奥樣は隱謀の露顯を心配し給ふが爲に、孃樣は主人公の安否を苦慮し給ふが爲に、常に明日の新聞を待ち兼ね給ふは、蔽ふ可からざる事實なり。朝鮮の戰報は、親族に從軍者ある姬君に非ざれども注意し給ふ事なく、大臣の交迭は、政治家の奥方も見給ふ事稀なるべし。されども時々覗かるゝ第四員の外は、小說のみが婦人社會の新聞紙なりと云ふことを得べし。勿論、婦人社會も嘗て國事犯罪者を出しぬ、薙刀は屢〻纖手に弄せられたり。予も亦政論を好み、軍事を說く婦人なしと云はず、唯其多數は斯の如しと云ふのみ。而して予は、此種の傾向を婦人社會の常態として、怪まざるのみならず、ろは婦人らしき婦人として、寧ろ

賀すべき傾向なりと云ふに躊躇せざる也。過去の婦人は斯の如くなりき、現在の婦人も斯の如し、未來も恐らくは然らん、予は其然あらんことを望む者也。果して然らむ、新聞小說が婦人社會に及ぼす影響は、決して少々なりと云ふ可からず、筆を新聞小說に執る者、亦頗る此に注意せざる可からざる也。

彼の新聞小說の愛讀者たる婦人社會は、如何なる知識を有するか。

世界は進步しぬ、眞美眼は頗る發達したり、嘗て春水に心醉せし者、今はゲイテを說けり、嘗て所謂夢幻劇を欣びし者、今は戲詩の人格を說けり、批評家も小說家も、兎に角眞美學を講せり。作者は既に戲作者に非る也。批評家も評判記の頭取には非る也。然れども、要するに是、男子社會の進步なり、特に批評家と作者との進步のみ、未だ讀者社會の進步には非る也、固より婦人社會の進步には非る也。婦人社會も進步せざりしに非ず、彼等も亦大學者を有せざるに非ず、特に小說家は、輓近輩出すと稱す、彼等の或る者は、確に文學趣味を有するなるべく、眞美學をも覗ひしなるべし、然れども、そは多からざる男子に比して、更に百千の一に過ぎざる可し、唯最僅小なる一部分のみ。彼等の多くの者は、一たび見し外題は、其終局を悉知するが故に面白味少しと云ひ。複雜なる趣向は、其行く先を氣遣ふが故に、興味多しと稱す。故に露伴紅葉の或る者はアッケなしと嫌ひ、淚香譯とれ家騷動の機械仕掛け多きを好む、彼等固り人格の美を解する者に非ず、美の眞趣を窺ふ者に非ず。

松尾芭蕉云ふあり曰、美を解する者は、鴻鴈の聲に云ひしらぬ美感を催し、美を解せざる者は、其肥たる胸を仰ぎ見て、其肉の美味を思ふと、予は固り憐れに富み、情に富む婦人社會が、斯の如く野卑なりとは云はず、然れども裸體美人は、一般の公衆に美感を與ふる

能はずとすれど、純然たる絶對の美は、未だ現今の婦人社會に、高尙なる美感を與ふる能はず、と云はんとす。彼等は戀愛小說の或る者を見ては、終に淸からざる感情を誘起することを禁ずる能はず、探偵小說の或る者を讀みては、不識不知、殘酷なる感念を發せんとす、正義者の不幸を見ては高大なる神德をも疑はんとし、自由論者の得意を讀みては、神聖なる服從の誠意をも忘れんとす。彼等は美文の美を味はゝんとせずして、小說の事實を讀まんとする者也。美を解する能はずして、文字と脚色とのみを解するもの也。彼等は古希臘の女神の像を見て、其裸體と云ふ事實のみを解し、直に混堂の光景に聯想する者也。是、特に婦人社會に限るに非ざるべし、男子の多數も亦斯の如き者あらん、今は唯特に婦人に就て是を云ふのみ。

婦人社會の趣味は、未だ斯の如く幼稚なりとすれど、婦人社會を顧客とする處の新聞小說が、彼等の愛顧を得んが爲に、其脚色を飜弄して往々美の約束に戾反する事あるも、亦恕せざる可からざる也。余は是を寛恕せざる程に酷ならざるべし、然れども予は更に眞美以外の拘束を以て、嚴に彼等の上に置かんと欲す、眞美以外の拘束とは何ぞや、曰道德的拘束是なり。

美を解せざる小兒は、飾菓子をも啖はんとす、啖ふもの丶罪に非ず、示す者の罪なり。眞美眼なき婦人社會の前に、德義の拘束を輕んずるところの新聞小說を示す者は、予は斷じて罪ありと云はんとす。されど筆を、新聞小說、ことに婦人を以て顧客となす所の新聞小說に執る者は、若し能ふ可くんば美の約束を守らざる可からざるのみならず、更に善の拘束をも受けざる可からず、彼等は決して、自由結婚主義を描く可からず、自主自由主義を說く可からず。殘酷なる物語、不義者の榮達を寫す可からず、彼等果して美と善との統一を能くせざれは、寧ろ善に隷屬せざる可からず。寧ろ小說

の名の下に、道德のお說教をなすとも、不正淫靡なる感情を誘起すべき事實を避けざる可からず。是彼等が人間社會、ことに幼稚なる婦人社會に對する道德上の義務なり。

斯く云はゞ世人或は云はん、汝は美を以て善に隷屬せしめ、プラントの舊夢を追ふ者のみと。予不肖と雖も、亦何ぞ偏狹なる唯善主義に與する者ならんや、何ぞ善と美とが、平等の價値を有することを疑ふ者ならんや。善と美とは人間の二大主義なり、道德は能く人間の制裁力を助長して、善の理想に達せしめ、美術は能く人間の感情を發達せしめて、美の理想に到らしむ。彼は嚴なる父の如く、これは惠深き母の如し、彼は制裁的なり、此は慰撫的なり。嚴父と慈母とが大なる人間を作るが如く、善と美とは圓滿なる社會を作らんとす、人世豈其一を欠いて可ならんや。單なる制裁的の道德のみを以て、人生唯一の方便となせし、儒道主義の失敗は、又唯善主義の偏狹を證して餘ある也。

然れども、盲愛の母が、動もすれば其幼稚なる者の我儘なる感情に放任して、終に放蕩無賴の子女を作る者多きは、諸君は日常見聞する處なるべし。慈悲深き母の手は、大なる制裁力を有する人に於て、初て其圓滿なる功果を見るなり。唯我儘なる徒ら者は、暫く嚴格なる師父の手に委せざる可からず、幼稚なる婦人社會は、先づ周到なる道德的拘束を要す。故に曰婦人を顧客とする處の新聞小說は、嚴に善の拘束を守らざる可からずと、予は此範圍に於ては、頗る勸善懲惡主義を歡ぶ者也。そは寫眞派に於る善美の調和の、容易に望む可からざるを思へばなり。

若し夫れ眞美眼を有する讀者に示さんとする者は、自ら別種の理想を要す。然れどもそは今日の問題に非る也。

上來予は、主として作者に對する卑見を陳べたり。然る

れども、彼の愛讀者たる婦人社會、及び家庭の監督者たる者が、其愛讀せらるべき新聞を撰擇するに於て、亦深く此に注意せられん事を勸告せんとす。昔の園の淸き薔薇も、はては汚れたる塵に朽ちぬ、恐るべきものは劍を揮ふ夜叉に非ずして、木の實を捧ぐる妖蛇なり。

予に、二小妹あり常に好んで新聞小說を讀む、洒掃縫織、暇あれば即ち、手新紙を絶たず。而して予は、世間の新聞小說が、多く彼等を利せざるのみならず、動もすれば彼等を害せんとする傾向あるを見て、久しく我が文壇の恨事となす、是予が、既に幾多前輩の說あるに拘らず、更に私見を開陳する所以也。

女子敎育一班（六）

三輪田眞佐子

女子の德育

いでや世の森羅萬象なに物か敎の種とならざらん、見よ蘆の枯れ葉に秋の風吹き渡り、艸村にすだく虫の音もいとかすかにして、あるかなきかに聞ゆるあはれさは、霞たなびくやよひのころの光景を追想して、こそいやまさるなれ、陰雲慘憺、霰迸り、狼の聲谷間にひゞく深山の凄しさも、おもふどち、都にありて隈なき月の光にあくがれ、逍遙しつゝむつかたりせし空の景色を回顧してこそ、いよ〳〵まさらめ。これと同じ理にて、人生社會の明暗もかゝるものなり。あはれ人情浮薄に流れ、たゞ疑念私利のみ行はるゝ世の有樣を觀るにつけ、忽ち往時の質朴懇篤なる世を追慕し、將た未來の和氣靄然たる世を假想して、誠にいまはしき思のみぞする。されど春色秋風は人を敎へ、陰雲明月は人を戒むるものなるか。

凡、物は必要ありて生し、利あるものは進み、害あるものは退くに至るものなれど、非理の望は必永遠に

續くことなからん。元來道德は正に人の修むべきものなるのみならず、その興敗は人生の榮枯に大なる關係あるをもて、必要こよなかるべけれど、最も心して講究すべきものならんかし。昔より不德にして終を全くせしものなし。恐れざるべけんや。わきて女子はその天性及び境遇より道德を重ずべきものなり。故にれのれは女子の教育殊にわが國の女子には、德育を重ずべきものなることを信ず。如何となれど、西洋諸國の如く、分業盛に行はるゝ時は、勢ひ各人個々に採るべき業あるを以て、内助的教育を尊ぶに及ばずといへども、わが國の女子は然らず。且つわが國には女子の數男子の數より少きを以て、配偶上餘數なければ、決して獨立する女子のあるべき理なきを以て、智育を重して、獨立の材料とするを要せず。反て德育を主として從屬の任務を盡せば足らん。これ國情の然からしむる所にして、人爲にあらざれど、背くべからず。子思曰ひけらく、天命のまゝなるものを性といひ、その性に從ふを道といふ。その道を修むることをこそ教といふなれど。

されど女子の德育は、女子天賦の德性を養ひ、智育及び体育と相待ちて、その世路難に堪へしめんために外ならず。古今東西なる學者が道德につきての見識、凡、二派に分るめり、その一、道は人の行ふべきものなれど、たとひ仁をなして富まざらんも、將た身を殺すに至らんも、人たる以上は忘るまじきものなりと。これぞ本然主義ともいふべきなる。孔孟の學派はこの類ならん。その二、德は行へど利あり、守れど益あるものにしあれど、必竟一身の安堵を得るためにこれに志すと、これをこそ實利主義とはいふべけれ。楊朱の黨これに近し。おのれ思ふ、此の二主義はもとより一に歸するものなれど、并せ説きて可なりと、試に道德をその體より論ずれど、そは人の踐むべき理なるをもて、

如何なるものも、この性を欠くときは、最早萬物の靈とはいふべからず。故に世にもし巧笑倩たり美目盼たる容貌の女子ありとせんも、女德の具はらざるときは、その精神の上より評すれば、眞の女子といひがたし、そは德は人といふ資格の要素なればなり。うべなり、世人の淑女を尊ぶは。

今德の用よりいへば、人生の幸不幸は、これを行ふと否らざるに由りて分るゝものなり。深く心せざるべからず。すなはち原因と結果の相關係する理は忘るべからず。女子誰か善良なる兒を產み、猶良人の愛も斜ならず。つねに心に顧みて、やましきことなきものから、自然樂しき生活を遂ぐることを願はざらん。されば、かゝる結果は善心あり、善行ある原因ありて、生ずるものにしあれば、苟も心の安き生活を願ふものは、德育を怠るべからず。近來制裁といふ言の葉を用ゐる人多ければ、その意味はなほかゝる應報をいふなり。故に國法を侵すものは、刑罰なる制裁を負ひ、道德を守らざる人は、良心に責られ、自ら苦痛を感ずるのみならず、社交の擯斥を受けて、人知れぬ憂き思ひをこそすなれ。あはれ、これを考ふるときは、德育ばかり忽にすべからざるものはなし。

女子德育の必要は、以上の如く、唯女子本來の面目を全うし、且つその幸福を長へに有たんために止まらず。尙社會の文化に影響すること、頗る大なるなり。見よ、忠孝節義の情深き女子は、亦かゝる心に小兒を化し、閑雅高潔の心に富む女子は、亦かゝる樣に家風を導き、所謂一家仁なれば、一國仁に興る理にて、遂に我が日の本のめでたき國体及び善良なる風俗を益強固にすることを得ん。豈、女子の德育は女子一身のためのみかは。

今や世界の東方多端なり。實にわが國はかゝる所に國境を占め、かゝる時代に遭遇し、愈國威を宇内に輝

し、天職を全うせんとするなり。されど人民擧りて不拔の氣、愛國の心强からむことを欲す。儉約の風勤勉の念、深からんことを望む。蓋、かゝる習慣は主として女子の氣風に基くものなれど、女子の德育を勵まし、國家の前途を誤るべからず。むかし(ギリシヤ)なる(スパルタ)國婦人は、その國男子と同じく、尙武の風ありたれどこそ、國威を張り得たりけめ、これなん女子の有つ感化力の例なる、おのれは切に女子の德育を盛にして、國家の元氣を振はしめんと願ふなり。以下その現況　標準　目的及び方法につきてものせん。

ゆふづくよ
をぐらのやまに
なくしかの
こゑのうちにや
あきはくるらん



貞正院

鹽井ふく子

子を育つるには、まづ、僞はること、をごり慾いまゝなることゝを禁ずべし。いつはりは、人の信を失ふ元にて、をごりは身を亡ぼす元なり。幼き時より、をごりほしいまゝなれど、其子長ずるに從ひて、ますます、甚しくなりもてゆきて、遂にはこれを矯むること能はざるものにいたるものなり。昔、北條時賴が、淸廉謹愼にして、自ら俸ずる事をうすくし、心を政事にもつぱらにして、天下の民心を得しは、多くは其母なる禪尼の敎化に由ることは、皆人のよく知れる所なり。また豐臣秀賴が、柔弱にして天下を失ひ、家を亡ぼし

しは、多くはその母なる淀君の愚痴のいたす所ならずとせんや。母、母たれど、子もまた必ず子たるものなり。されど、世の中の女子たるものの、人の母となるものは、よく〳〵これらの事を鑑みて、幼よりよく身を愼しみて、をごらぬことを敎へ、その家の繁榮、其子孫の長久ならむやう、心懸んころ肝要なれ。

何處の何といふ諸侯にか、如何なるもの丶娘、如何なる名の女子にか知るによしなけれど、或る一万石ばかりの所領なる諸侯の妾にて、貞正院と聞えし人ありけり。仕へていくほどもなく、男子を生みけれど、さる位名を付けられ、小き館を營なまれて、住みけるとか、此の男の子長ずるに及びて、いとかしこく、よろづ愼しみ深くして、名聲いと高かりけり。此の家にふかきちなみある、或大國にて、その太守卒去し給ひて、嗣子なかりしかば、家老眷族うちよりて、相談の上、此の男子を跡嗣になさむと申入れぬ。小國の方にては以ての外の事なり。小國といひ、且つはしつけもなく育ちしものなれど、大國の主將となりて、一國を治めむ事覺束なく、誠に思ひもよらぬことなりとて、いたく辭退しけれども、大國の方にては、此君ならではと、深くもれもふが上に、昔より深き由縁ある家なれど、如何なる事ありてもとて、老臣の面面頻りに詞をつくし、しば〳〵おしかへして申し入れければ、漸くに承ひきて、大國の方へ行くこと丶はなりぬ。さて、この君の大國へ移り給ふには、定めて供廻りなど、すべてはなやかに立派なることとなるらんと人々おもひ居りたるに、誠にさはなくて、よろづその家の古風を守りて、格例を正しくして、少しもかざらざるに、人々皆案に相違して、いたく驚きたりとぞ。

鄙に育ちしもの丶、しばし都なれ、賤しき身の俄に貴き地位を得れど、大方はこ丶ろをごりして、本のよもぎの心を、まもるもの少く、まして、人の妾など云は

る丶者は、男子一人も生めど、鬼の頭を取りたるが如き思をして、をごりたかぶりて、人を侮り、我儘の振舞をなすが常なるに、此の貞正院は、かゞかりかしこき男子をまうけ、剩さへ、其の子大國の守とさへ成りたれど、いと時めきたれど、いよ／＼身をつゝしみて、つゆ驕り高ぶりたることはなかりき。

かくて、大國の方にては、老臣だち打ちよりて、評議の上、この御實母貞正院殿を、御館へ引き取り、知行千石を御臺所所領として、進じ奉らむとて、ある日、小國のかたに來りて、この由を貞正院へ申し、是非に御入來あるやうにと、只管に請ひしに、貞正院は涙をこぼし、誠に御志のほどは忝く、幾重にもうれしく思ひ侍べれど、もと、妾は、いと輕きもの丶娘なるに、おもひがけず、先君の事の外なる恩寵をかうむりて、男子を生み得し事、如何なる冥加にかと、恐多く覺ゆるに、其の子此の度大國の御家督を繼ぎ、大國の主將となること、誠に空おそろしくなむ。されど今かかる素性いやしき身が、憚りもせず、御館へ行きて、大守ともろともに住みなど、大守おのづから野鄙に落ち入り給はむこと、血にまじはりて赤くなるが如くならむ。さることありては、大守の爲めにならず、また一國の爲めにもならず。たゞ此まゝにさし置き給はんこそ、反て國家のためなるべく、我身もいとこゝろ安く思ひ侍れ。妾は當家に在りてだに、賤しく生ひ立ちし昔にも似ず、衣食なども餘りあるものを、まして、千石の知行給はらんなゞとは、おもひ外の過分の仰せになむ。志のみにて、妾は誠に嬉しう思ひ侍りぬ、その志の知行を分ちて、日比忠勤の者へ、加増なし給はゞ、いかばかり士もよろこびて一層忠勤を勉げまんずらん。此後決して／＼、さる御心遣ひはかまへてあらせ給はぬ樣にとて、いんぎんにのべければ、老臣等はひたすらに感じ入りて、返さむ言葉もなく、涙

を流して歸りたりとぞ。

さて、大守の方にては、いろ〳〵と心を碎きて、御母公につかへむとなしたりしが、貞正院はたえておとづれせず、其後一度大國家へゆきたりしが、はじめての入來なれどとて、もてなしもいとよく、家中の者ども、門前へ、盛砂、飾手桶など出してむかへたり。かくて、貞正院殿は、御館の門前にて、駕籠より下り、女中二三人供に伴れて、裙小短にかゝげ門番の人に向ひて、丁寧に腰かゞめて禮して通り、屋敷内へ入りても、侍どもに、數多逢ひたりしかど、一々敬禮すること、あまりに丁寧なりしかど、皆殿の御母公とは知らずして、行き過ぐるもの多かりきとぞ。さて大守の前へ出でても、禮義正しく、偏に君臣の如くにして、始終手をつかへて低頭し、大守さま〴〵に乞ひこしらへて、上坐へ進めんとするを、勿體なし〳〵とて、遂に上坐にもつかず暫くして暇をつげて、歸館せしと云ふ。

かむかりに謹み深き人の子なれど、大守もまた小國より大國の主となりたれど、少しもおごらず、よろづ其家の古風を守りて、節儉を旨とし、平日召し給ふ所の衣服調度も、かざらずして、臣どもをもいたはり給へりといふ。また隔日には、役人共を召して、政務を談じ、公事訴訟は必ず自ら裁決して、寃枉依怙沙汰などのなきやうに、心がけ給ひぬ。たま〳〵死罪にあたる者ある時は、終日物もまゐらず、夜もすがらいもねたまはずして、顏色も殊の外にあをざめて、をはしゝとぞ。其公事訴訟等を裁決せらるゝ時、少しにても、隙どりては、公事人、訴訟人など難義せむとて、その場にて、臣の面々と列りて、辨當をものしたまひけるが、其辨當の菜にも、唯香のもの、燒味噌のごときものゝみなりしに、佳肴珍味などを用ひたる臣ども皆耻ぢて、額に汗して面をも得上げず、痛み入りて、其後は奢をつゝしみ、皆この賢君にならひて、國中大に治まりた

りとぞ。いくばくもなくして、此の賢君、わかくてみまかりたまひければ、人々痛く惜しみ悲しみ、慕ふ事限りなかりけり。げに此の母にして、此の子あり、世に貴きものは、親の敎へなりけり。

この貞正院の、曾つて仕ひたる女中に、靑く黄なる色の小袖を着けたるがありけり。貞正院、其女中に向ひて、汝が着けたる衣服は、何といふ色にかと問ひけるに、こは、山あゐ染と通例は申侍れど、誠は山藍染と申すものなり、そは陸奥の山あゐと申す所より、染め出す故とも、又夏山の若葉の靑々として、あゐのごとくなる故とも、又定家卿の歌に

あはれしれ霜より霜にくちはてゝ
　　ともに古にしやまあひの袖

とあるに由るとも傳へぬ。このうたによりて、定家卿が佐野の渡の雪の夕ぐれ、馬に乘りて、右の袖をうちかつきてれはすさまを畵にかきて、是を山あひの袖といひて、畵家の傳授なりとかや。そは、小野の道せまきが上に、雪降り積みたれど、袖拂ふべき事もなりがたき程の、山間なりしかど、かくやまあひの袖と申すとかや。いづれが誠の事にか、知り侍らずとて、愼しみて答へけるに、貞正院、重ねて、その古き歌どもは、汝が兼てより、さとり居りしにやと尋ねらるゝに、彼の女、いなとよ、こはさる年、御館に宮仕したりし、瀧瀬とやらむ申す人に、はじめて聞き侍りたるなりといひければ、いたく感じて、今の世には人より聞きにしことも、己れ自ら知り居るさまして云ひなすが多きに、汝の律義なるは、いと〳〵めづらし。かくてこそ、誠にものを知りたるなりとて、大に賞めたまひて、綿、絹などを、數多取らせたりしと云ふ。

此の女、大切の用事を承けたる前夜は、粥、梅干、味噌より外、何ものせず、身をつゝしみて、明日の用事をつとめたるなど、いと眞實のものなりしかど、貞

正院、此女をいたくめでゝ、遂に自らなかだちして、ある貴き侍の家へ嫁せしめしとかや。げに此貞正院は、よろづすぐれたる賢女にして、人の母の鏡にこそ。

水野氏の妻

山川清素

夜はやう／＼ふけ行きて、繁かりし人影も今は全く稀になりぬ。兩國の流は微にさへ渡りて、物さびしきに、空には陰雲閉ぢて、こゝ彼所に明滅せる星の數さへ心狹げなり。心からにや物音の聞ゆるやうに覺ゆるは我が足音かとも思はるゝに、何所ならむと立ちとまりて、耳そば立つれどまがふ方なく物のけはひす。啾々として泣くが如きは夜をあさる犬にもあらざめり。すかし見れど黒き物影の動く心地す。近く寄りて窺へは、あなやの際に身を跳らして生死の境を異にする間一髮なりけり。性來俠骨磬しき腕は事の由を問はん遑なく、絶えむとしたる玉の緒を繋ぎ止むれど、こは少女にてありき。引き止めたるは誰。引きとめられたるは誰。一は水戸の義人櫻任藏ぬし。一は薄命なる節婦水野某にぞありける。

廣き世の中、不幸の淵は此所にも彼方にも少なからず。去かも禍神は念々に人を誘ひて此の淵に投せむと計るなり。一度此の淵に投ぜられたるもの偶々逃れ出るものありと雖ども轉々として淵より淵に落入り行きて終生浮ぶ世なきもの又甚多きなり。此の憐むべき節婦水野某をも禍神は容赦なく怖しき淵瀬に投ぜむと爲つるなりけり。

身は固商家に生れて、幾年月を春のみの世とかしづかれたりしが、禍神は無情にも父を此の世より誘ひ去りしかど、早くより辛き浮世の苦を嘗めたり。然のみならず、持てりし兄は酒色に身を投じて、有りつる限

りの家藏は殘る方もなし。今は居るに所なく着るに衣なく唯路頭に倒れて後は彼の怖るべき不幸の淵に轉び果つるを待つばかりの賴みなき身とはなりぬ。此の家なき妹を見て悦び、此の衣なき同胞を持て笑めるは獨り殘忍暴戻なる兄あるのみ。飽くことを知らぬ兄は少女を誘ひて聞くだにいまはしき憂河竹の流の淵に沈めさせむと企てたり。斯くと悟りたる少女の驚きと怖れたる心のはては清めがたきを知りて同じくは彼の淵よりは、この淵こそとて忍びて兩國の淵にと趣きたるなりけり。あはれ其の折の少女が袖の雫、そをとゞめたる人は萬斛の思ありしなるべし。

任藏はその境遇の餘りに痛はしきを憐みて、母に告げて家に引きとゞめ又彼の兄を呼びて痛く其の不義をさとし、其の不仁を戒め固く後の事を盟はせて金三兩を與へて放ちやりぬ。されど打續きたる不幸の淵を出でゝ暫時身を休むることを得たり。少女は固より天性さかしく心きゝたる身なれど任藏の母にかしづきながら糸針の業大方は心に得つ。然のみならず顏ばせもろうたけく起居も閑雅なれど、さるべき人を求めて月下の契を結ばするも然るべしとて任藏の母は巳が子の如くに心を掛けつ。

茲に旗下某の二男にて水野と呼ばれたる武夫ありけり。幕府講武所の教授方の助手に召されて扶持をも賜はれる身なり。一刀を挾みては兩の手を擴げても妨くるものなきは固より、文の道に於きてもなかなか人後には立つべくも見えず、此の男此所に一年ばかり寓居したるものから、任藏とは刎頸の交あり。其の身三拾路を越えながら猶妻を持たねど任藏は彼の婦人を語り出でゝ決してふさはしからぬ緣ならざるよしを說けり。水野も兼てより心掛けたる事なれど其の不遇を憫み其の節義を愛でゝ遂に風靜に波穩かなる鴛鴦の契は

結むれぬ。今は全く不幸の淵を放れて春暖かに秋涼しき世に立ち然も徳川武士の一人武藝を以て世に響きたる水野某の配者とはなりぬ。

彼も一時なり。是も一時なり。有為轉變の世は誠に圖り難くて花散り方の春の末は一朝吹きすさぶ嵐に徳川の流をかき漲らせて、上野わたりは落花狼藉の衢となりぬ。

吾も徳川の流の末に生ひ立つ身、苟も武士とありては名も惜しけれど花もあたらし、順逆の理辨へざるにはあらねど一度義を結びたる誓約をいかがはせん。とてもかくても一度は死すべき身の、此の三十年の露の命は何によりて支へたる。生れてより鐵と血とにて固めたる兩腕は誰に向てか振り上ぐべき。天日に向ひて刄を翳すはさら〱我が本心にはあらねど、さりとてさりとてといひつゝ涙を呑めるは水野なり。泣き崩折れたる妻を慰めて今まで波も起らず。風も立たず。此の世の限りはと契りたる汝をふり捨てゝ、申すも畏きわたりに今更彰義隊と名乘りて矢面を向けむこと吾は生きたる心地もせざるを、例令進みたりとて退きたりとて一轉する時世の程は人力の支ふべき所にあらじ。此の迴り來る時勢によりて、恐れあれど傾きたる徳川の基礎は覺束なし。此の覺束なき徳川に累聯せる吾が一味、之と共に消え行くべきは當然の理、後は水澄み影清き君が大御世に復るべきは言ふまでもあらず。汝は其の美はしき君が世の惠の露に潤ひてよ、夢ゆめあさましき心起して朝敵の片破とな侮られそ、君の御民の數になもらされそなど、或は賺し、或は悟しても、放たじとすがり纏はる妻をふり拂ひ、期したることゝて、明治戊辰の四月、我も散る花に遲れじものと水野は同志數百人と共に東叡山の麓に一種の櫻となりて散りぬ。

偕老同穴と契り給ひながら獨り行き給ふが武夫の習

か。限りあらむ道にも遅れまじ、先立たじといひかはしたる睦言、早く忘れ給ひしか。吾はかの世に、汝はこゝに長らへよとはよもや吾が夫の誠心にはあるまじ。良人は賊名を負ひながら、連添ふ妻に良民たれとは情に似てなか〳〵に怨なり。聞けば、味方は日毎に官軍に悩まされて、昨日は逃ぐるもの道に捕へられ、今日は討たるゝもの前後相弁ぶと、一刻は一刻毎に力極まり、一念は一念毎に勢竭くる味方の勢、吾が夫の命も今はありや無しや。ありとも明日とは保ち難き天運、さても吾が身は何とかせむ。如何にかすべき。待ち給へ、吾が夫。我も追ひかけ行くべきに、早り給ふな。苦しと聞ける死出の山路も諸共に手取かはして登りなば中々に嬉しかるべきになど日毎に繰り反し、言ひ暮しながら、十日ばかりは現にたどりたれど今は上野に敵の片影なしとの噺無ければ嬉しや世には心殘すべき事もなし。打ち續きたる世の憂ふし、初めて遁れぬ。九品蓮臺の來む世の樂み、今更何とてたゆたふべしやはといひつつ取出したる秘藏の短刀、これも吾が良人の片身、なつかしとばかり押戴きぬ。あはれ清淨無垢玉を述べたらむが如き膚に一條の紅の色を見せ、おだやかに笑ふが如き顏貌は良人を慕ひて永く眠りぬ。

義によりて生き、義に從ひて死する人の心の固きは何に譬へむ。金石も碎くに由なからむ。鬼神も施すに術なからむ。此の水野の妻の如き、吾が思ふ心の外には神もなく、佛もなく、又人もなく、物もなからむ。義のある所に身をたしなむるは人目を思ふ故にもあらず。義のある所に心を苦しむるは世間を裝ふ為にもあらず。唯吾が身にあきたらぬふしのあればなるべし。是を、走りては不義の奴となり、背きては不貞の鬼となり。しかも身の外貌をてらひ、人の見得を飾る輩に比べなば、其の隔れること天淵とやいはむ。雲泥とやいはむ。



活花（第八）

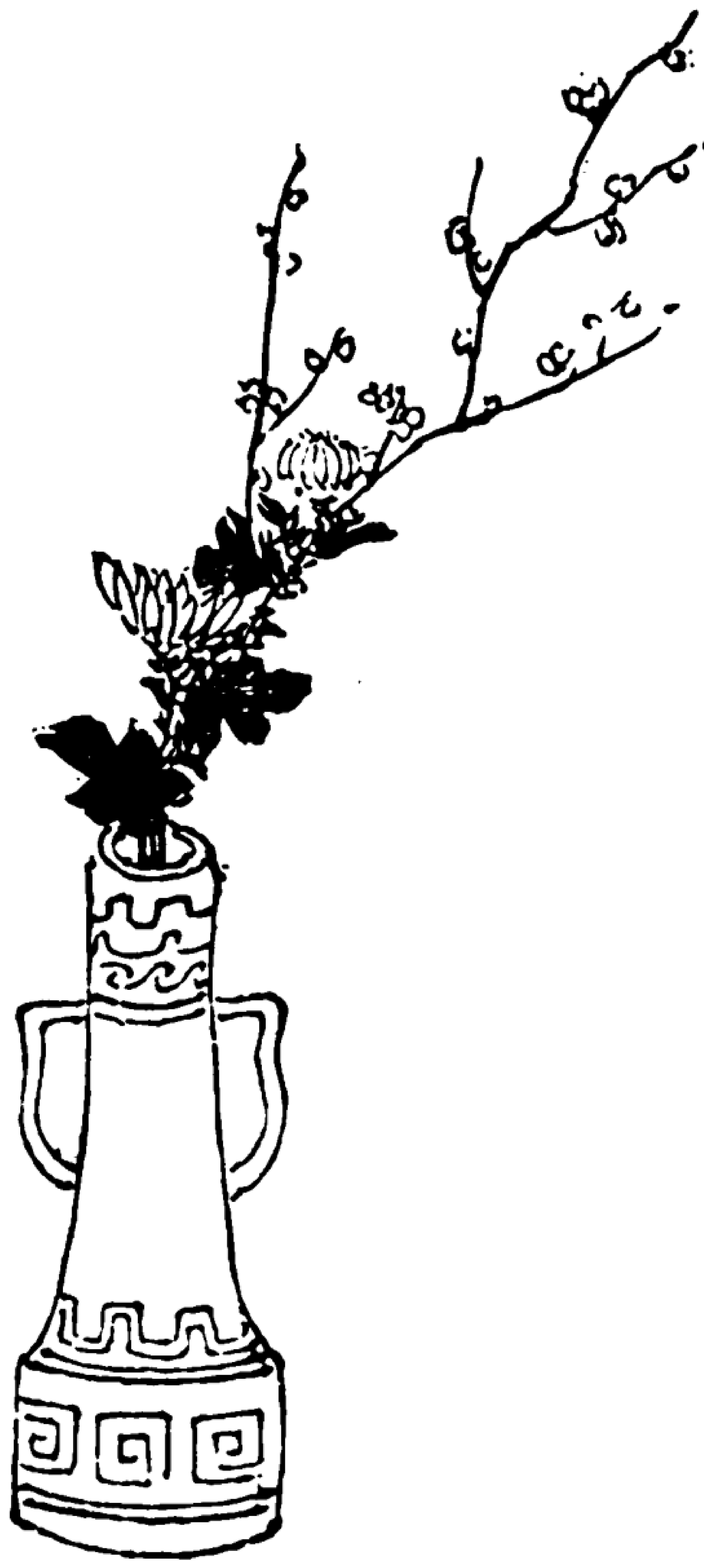
（菊と梅もどき）



田邊和氣子

百艸(もゝくさ)はみな霜(しも)がれて、花(はな)なき頃(ころ)のなぐさめにとおかね色(いろ)ろふ梅(うめ)もどきに、青(あを)き葉(は)のところ〳〵付(つき)たるころ、又(また)たとしへなくをかしけれ、これを一種(しゆ)活(いく)るもはえなけれど、まがきのもとに雪(ゆき)とみえて咲(さき)みだれたる白菊(しらぎく)

は色のとり合もふさはしけれど根〆に添るぞよからむ。さて梅もどきは其木質もろきものにして、手あらくもてなさば名殘なく折れなむかし、されど其枝ぶりを見たてゝ眞副を定め、寸尺は例のごとく三ッ割とすべし、枝かすかなれば、眞の前又は後へあしらひを加へてよし、根〆の菊は五本又は七本其恰好によりて見斗ふべし、菊は白きにもかぎらず、黄なるもよし、花瓶は薄ばた、又は竹筒にても用ゆ、活くづを書棚の上なる一輪活にかろくさしたる中〳〵にをかし。



（活殘りをさしたる）

たちぬひ記

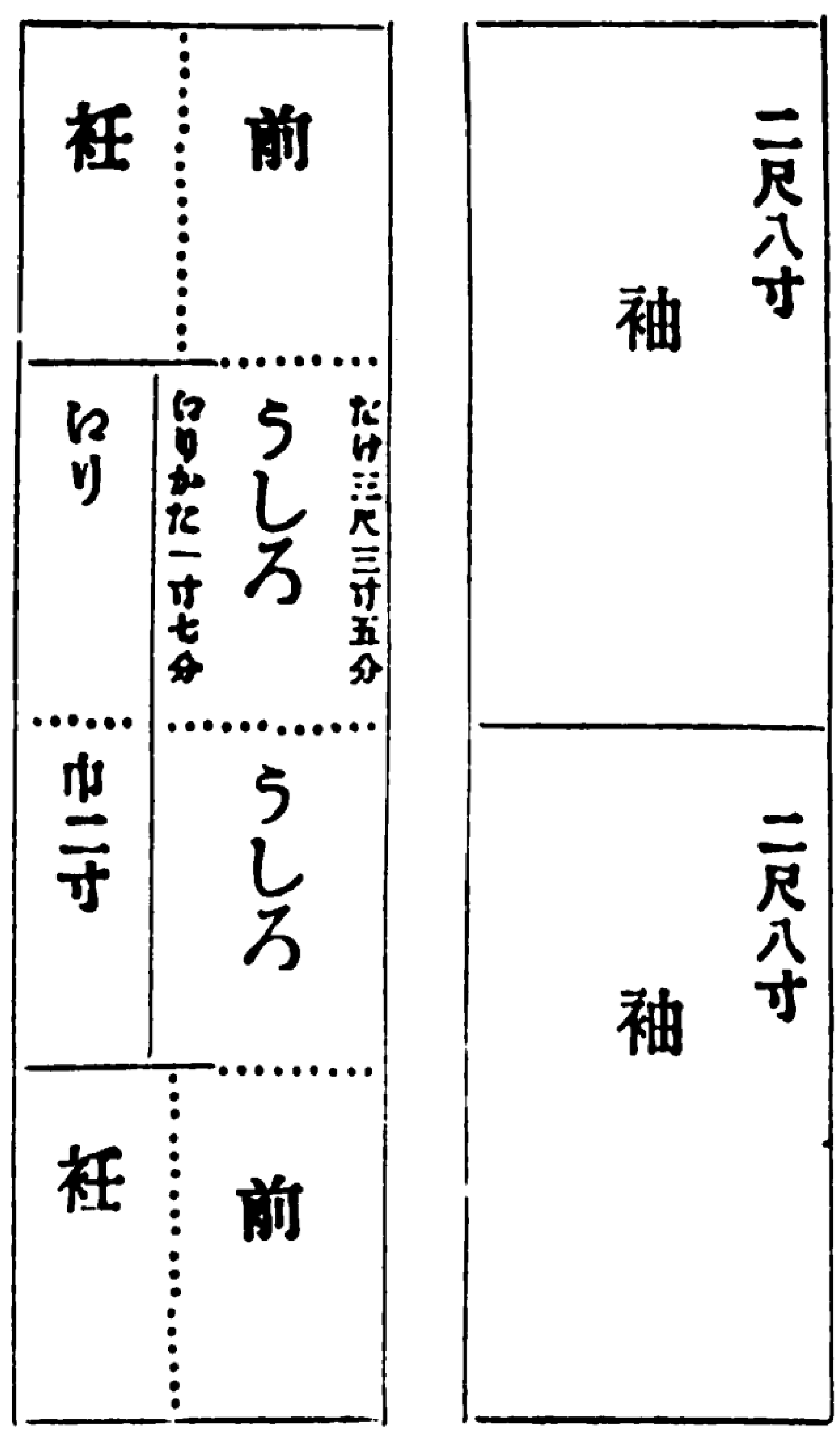
西山たい子

（十一）四ッ身の裁ち方

四ッ身の並なるは、一丈九尺にて出來るものなれど、今の人たちの如く、袖丈けを長くするには、切れも又多く要すれど、此處には、その並なるを示さむ。

まづ、最初に、例の如くに、袖を左右ぶりとり、次に殘りたる切れをとりて、眞二つに折り、又そのをりたる切れを、眞二つに折り、都合四つ折りとなりたるものより、襟方になさんと思ふ方を、三寸七分だけ切りれきて、袋になりたる方を、襟方に切りたる處より、二寸巾に、眞直にかきとりて、後の身衣となし、かゝぬ方を、身衣の前となすなり。よく〳〵圖を見合してさとるべし

（四ツ身裁方の圖）



前と、衽との間のすぢは、空ぬひなれど、切るべからず、木綿巾のまゝにておけどよきなり。

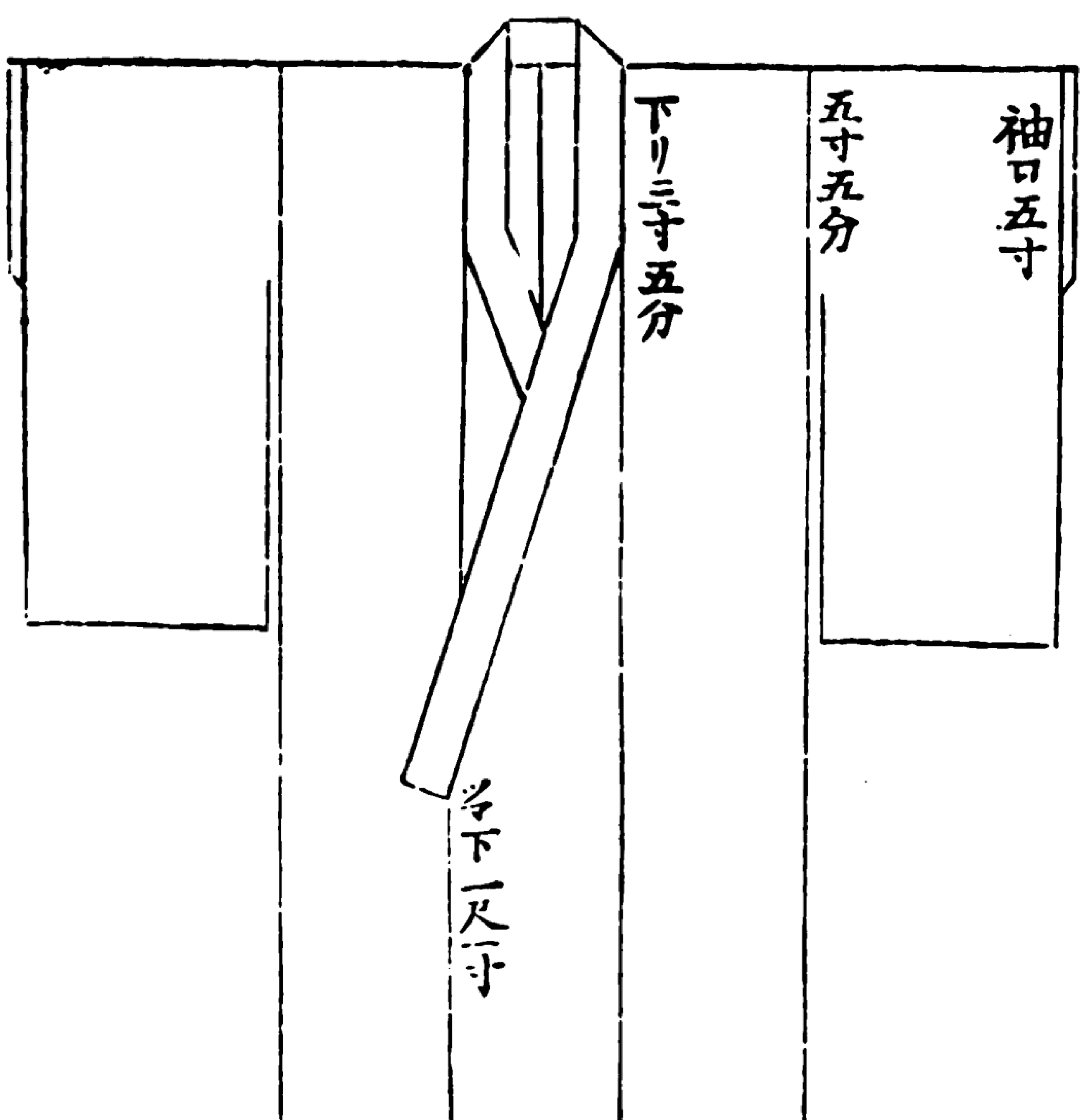
また横の……は、折りめの條なれど、これも切るべからず。後の身衣の、袋になりたる處は、背縫ひを縫ひて、後に切るべし、始めに切るときは、襟まで切らずどならず、襟を切るときは、はがすどならずなるなり、よく〳〵考がへて裁つべし。

（十二）四ツ身綿入の縫ひ方

三ツ身の縫ひ方と、大方同じなり、まづ袖口をあけて、裏表とも同じく角に袖をぬひおき、それより身衣をとりて、背を縫ひ、脇をぬひ、それより前巾と衽巾とをきめて、えり方まで、縱に條をつけて、空縫ひにすべし、裏表とも縫ひたれど、裾を合せ、襟をつけ、四袖をつけ、例の如くに表のうらを出して、綿を入れ、さて引きかへしてくけ上ぐるなり。

よく圖を見合すべし。

（四ツ身綿入縫上りの圖）



此の四ッ身は、七歳より十五歳位まで、用ゆる物なり、七歳ぐらひの子供なれど、後ろ巾を、七寸前巾を五寸、衽巾を三寸として、七五三に縫ふが通例なり、大なる子には、なるべく縫ひこみを少くして、衽巾等も廣くすべし。

此の外、衽下りは、三寸五分、褄下一尺一寸、袖巾七寸五分より八寸、袖口五寸、袖付五寸より五寸五分大小によりて、宜しきやうに爲すべし。肩揚げ、腰揚げ等もろの子に從ひてよく合ふやうに爲すべし。

だいどころ

前號に淡薄のものゝみを擧たれど、今回はひたすら濃厚のものを揭ぐとにはあらねども、當時の「だいどころ」に洋食のできぬも、不自由ならんかと、其普通たる二三種をかゝげぬ、

シチウ

先づ牛肉(切屑にてよし)、玉葱、人參の三種を薄く切り、次ぎに置鍋に「バター」を少し入れて消かし、之に前の三種を投じ、コゲるまで煎り付けて後、水を多量に注ぎ入れ、二三時間煮詰て、其汁を取置くなり。之をコゲ汁と云ふ。扨てコゲ汁を造る前に、湯で煮きたる馬鈴薯、玉葱、人參の三品を、薄く切りたると、牛肉を能き程に切りたるとを、「バター」若くはスープ油にて、少しコゲる位に煎り、前のコゲ汁を注ぎ、之に小麥粉少し、セリー酒、食鹽等を加へて、鹽梅し、「ストーブ」にて蒸煮にし、二時間程經て、牛肉を出し、汁を漉し、其汁に別に湯で煮きたる野菜と、此牛肉を入れ、再たび十分間程煮るときは、美味なるもの出來るなり。但しシチウに用ふる牛肉は犢牛肉を宜しとす、又た玉葱の小ものなれど湯でずに丸のまゝにて、初よ

り牛肉とともに煮るをよろしとす。

ロール、キャベーヂ。

キャベーヂの葉を、一枚づゝにはなし、鄭寧に洗ひて、ザット鹽湯となし置き、肉の(牛肉鳥肉いづれにても)筋を能く取り去り、細かにたゝき、鹽と胡椒を少し加味して、よく混和し、之を牛乳にて程好ノバシ、扨て前に湯で置きたる葉を、板の上に二三枚重ね置き、其上にタヽキ肉を置きて、其の出ぬ様に葉をクル〳〵と捲き、鍋の底に葱人參「キャベーヂ」杯の類を敷きて、其上に捲たるものを置き、コゲ汁に小麥粉を加へて、鹽加減をなし、蒸煮すること、凡そ一時間にて出來るなり。

コロッケ。

馬鈴薯を湯で、裏漉にて漉し、之に鹽と雞卵の黄身を好き程に加へ、鍋に「バター」を投じて火の上に置き、此の薯と雞卵の混和物を、其中にて更らに錬交置き、扨て肉(牛鳥肉類)を細末に切り「バター」にて煎付け、之に前の錬薯を混せたるものを手にて丸め、楕圓を細そめたる様の形に、長二寸位づゝに做し、之に麵麭粉を塗付け、又た其外皮に雞卵の黄身を塗りて、麵麭粉を付け、之を牛の油にて揚ぐるなり。

ホイロ、ポテート。

馬鈴薯の皮を剝き、鹽湯にて湯で、其湯より揚げて直ちに鹽をふり掛け、之を乾きたる鍋に入れ、文火の上に掛け、鍋の中にて其薯を轉がし、水氣を去りて乾かすときは、薯の周圍に白き粉をふくなり。之をホイロポテートと云ふ、サッパリして好きものなり。

牡蠣フライ。

新鮮の牡蠣(殼を去りたるもの)を布巾にて水氣を取り、鹽と胡椒を其兩面に撒掛け、小麥粉にてくるみ、其外に鷄卵を塗付けて、又麵麭粉を付け、之を「ラード」の油、或は牛油にて揚るなり。

肉の摘煎

肉(鳥牛肉類)の筋を取り去り、よくたゝきたるものを小く丸め、扨て鍋に「バター」少量を投して火に掛け、其熱したるを待ち、丸め肉を入れ、斷ず轉がし、其出來たる時に、鹽と胡椒を少し撒掛くべし、但しバターを好まねば、其代りに「ヲーブ」油を用て佳し、兎に角冷ざるうち食せざれば味わろし。

田毎蒸。

肉類(鳥牛肉類)を醤油にて火を通し置き、葱と白瀧少し計を油にて煎り、味淋と煮出しにて鹽梅し、丼類に盛り、其上に前の肉を置き、又其上に雞卵一個をぬきて、之を蒸籠にて蒸すべし。

右の二品は折衷料理ともいふべきものにて、洋食にはあらず、只だ滋養を主とせしなり、殊に摘煎は病人抔の喜ぶものなり。

飯二種

甘藷飯、甘藷の皮を剝ぎ、好き程に切りて、ザット鹽湯でとなし置き、常の如き水加減にて釜に米を入れ其沸立たるとき前の甘藷を投じて飯を炊くなり。飯の出來たるとき好くかき交ぜて用ゆべし。

栗飯、栗の上皮を去り、炒鍋にて煎り、澁皮を取り、前の甘藷飯の如く米を入れたる釜の沸立たるところに其栗を投じて炊くべし。食する前に好く混和して用ふるなり

書きあつめくさ〴〵

杵山

いとま〳〵に、ふむこの底よりふるき書どもとりいでゝはこれかれとひらきみつゝ、これはとおぼゆるふし〴〵をも物にかいつけたるが、こゝら積りにけり、折あらむひとつ〳〵こゝろみてんとおもへど、さる折もなくてすぎぬ。今こゝには家政の上のこと

をのみとり出つ。いかゞわらんこゝろみたまひね。

切拔繪紙形のはりかた

天井はめいたなどに繪を紙形切ぬき押すことあり、人形、山水、花鳥などのこまかなるものなど切ぬきたるは、ひら〳〵として心のまゝに張付がたく、繪にものびちゞみ出來て、見ぐるしきものなり、其時はまづ切ぬかざるうちに、繪本別紙にうつし置、切ぬきたる紙形の繪をも此うつし置たる別紙のうらへ水張にして、扨此繪形の紙に粘をわきへ付ざるやうに付けて、別紙に持てれし付、張りて後、此別紙をまくりとるなり。別紙のうつし紙は水もり故、はなれのく時は、繪形の紙計、殘りて筆勢一ケを不損物なり。

壁に紙を張付くること

壁にこし紙又は惣張付を唐紙或は地の紙にてもするに、必柱ぎはより離れとるゝ物なり、是をとむるには、先柱ぎはの壁へ水の內へ通る程ためし打て後紙にたやうふ海羅合てよく付て張べし是よりしてはなるゝ事なし。

灰吹竹の貯へかた

火入に火つよき時は、火氣にて灰吹竹にわれひゞき出來る物なり、故に灰吹竹を切て、香物を漬る如く、糠味噌へ一ケ月程漬置て取出し、用ゆれど何程の火氣にも破れひらきなし。

鰌魚の煮かた

鰌魚を煮るに初より味噌汁に入て煮ど味噌汁濃つまりて惡し、先鰌魚を煮には、米の粗水の二番をとり、是を能くわかし、扨どぢやうを深き器物に入て酒を見合に入れど、鰌魚酒にて死するなり。是を酒共に白水のわきたる中へ入て、暫時たくべし、扨外の牛房等入度は一沸して、入て煮べし、又味噌は外にかたく摺て出さんとおもふ時みそを入てと一にへして出すべし、如此すれどいかにもどぢやう和らかになり、みそも沸つ

まる事なく、さらりとして胃にもたれずして、病人の養生にもよし、他の傳色々有といへども、此法無上の法なり。

梨子を久しく貯ること

梨子を貯へ置んと思ふ時は、秋よきなしをとり、上を漆にてぬり置べし、何時迄貯ても損せず、用る時うるしまたなしの皮ともに去り用ゆべし、秋とりたての如し。

栗の貯へかた

栗はいかやうに貯る法にて貯へても、芽出る物なり、然れ共、一法有、能栗を大きなる壺の口細きに一つづゝ入て、壺の口にかたく切りわらを込て、此壺を逆しまに砂地に置べし、何時までも損せず、用るとき出し、又斯の切わらのすかぬやうにすべし。

針を貯へて銹させぬこと

針を常に杉灰の中へ入れくべし、銹出ず、妙なり。

竹藪の根外へ蔓るゝを防ぐこと

竹藪の根外へはびこりて搆ひと成時は、わらめの煮汁を防がんとおもふ所の地にまくべし、それよりこなたへは生せぬ物なり。

草木植替へ

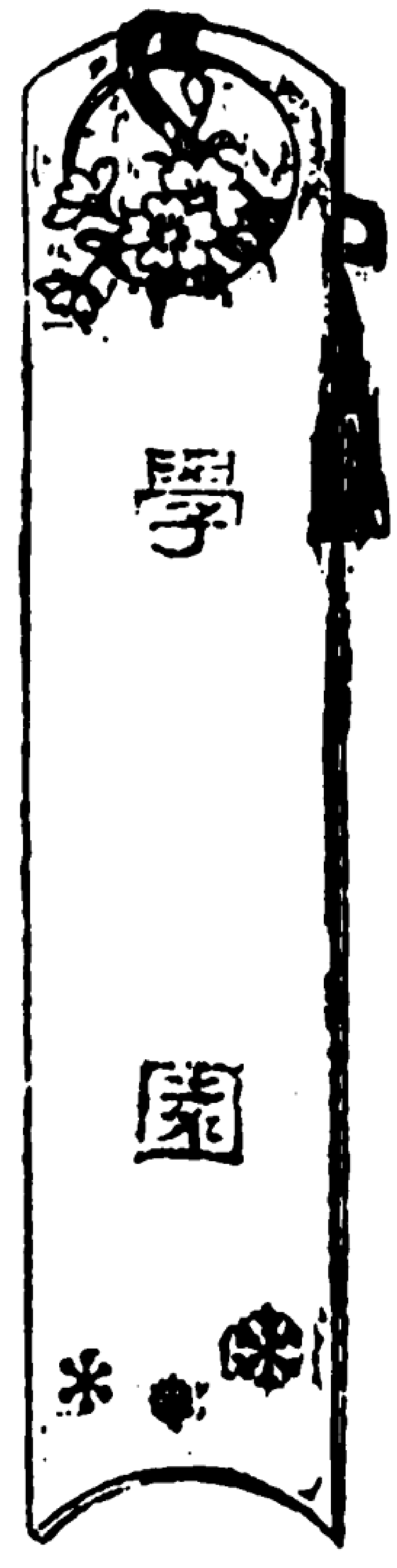
諸の木うゑ替時分は、一切夏木の類は、春と秋と植かふべし、但春はいまだ葉の出ざる時、植べし、秋は葉落て植かふべし、冬木は夏葉しげりたる時、四五月頃植かふべし。

喉に魚の骨の立たるを治すこと

喉へ魚の骨たちたるをぬく事は、串柹なりとも、甘ばし柹にても、一口に呑むほどに切て、實をさり内の肉の外へ出るやうにかへして、牙にてかみきれぬ程にかみて一息に呑べし、忽ぬくるなり。

毒虫にさゝれたるを治すこと

毒虫にさゝれたるには、その儘胡椒の粉をそくい飯にまぜてぬるべし。妙なり。



わが學園（六）

鹽井正男

古代の歌謠にあらはれたる心情に就きては、夫婦の情、親子の愛、君臣の情、同胞の愛、皆總じてあはれにうるはしく、すなはちまめやかなるきはのもののみなりし事は、前號の學園の末に、かつ〳〵これを記したり。

而して、なほ古代の歌謠の心に就きて、一言二言を記すべきことは、其の心の極めて質朴なる事なり。毫末も巧言令色の虛飾なき事なり。皆あるがまゝ思ふがままにまかせて、露ばかりも隱さず憚らず、塵ばかりも包まずつくらず、故に無邪氣なる少年の如きけしきありて、天心爛漫實に捨て難き可憐なる所あり。其の思想の如きも、又幼稚なる小兒の如し、極めて單純に、極めて淺薄に、極めて狹小に、極めて粗雜にして、決して複雜ならず、また深遠ならず、また高尙ならず、また綿密ならず。これ蓋しやむを得ざることならむ。元來人の思想といふものは、社會の狀態に伴ふものなり、人の思想の發達は、社會の文明の發達に伴ふものなり、社會の文明の進めば、人の思想も進み、人の思想發達すれば、社會の文明また發達す、社會の狀態と人の思想とは、必ず相伴うて進步するものなり。

而して、物は總じて進步するにつけて、單より複に入り、粗より密に入り、小より大に至るものにて、これ進化の不變不動の規則にして、社會の進化も、又此の規則に從ふものなり。今日の社會を見わたせば、物の數、事の品、百般の事物具りて、社會の狀態は實に榮に榮えたり。されども、こは近き昨日今日とみに出で來たりたるさまにはあらず、また決して遠き昔時より、かくてありたるものにも非ず、其の初めは、

渾沌たる一物に過ぎざりしなり、代をかさね年を積みゆくまゝに、一事二事一歩二歩いやましに發達し來りて今日の文明と成りしは、さながら野山に青々と茂れる樹木が、初めは一粒の種子なりしが、二葉となり三葉となり四葉となり、枝をつくり小枝をつくり、はづえさづゑ、いやつぎ〳〵にいできて、さては大きく茂りに茂りて見るに至りしと同じなるは、わが新しくいふまでの事に非ず。なほこゝと泣くのみなる赤兒の、月日を經るまゝに、智識もふえ、運動もふえ、精神身體共に具り行くと相似たり。老人の博識も、もとは赤兒の無識なり、無識の赤兒が、日に一事、月に一事れはえゆきて、限りなき有識とはなれるなり。開化せる繁雜なる社會も、もとは未開の單純なる社會なりしなり。單純なる社會が、日に一事月に一物、ものごとの加はりゆきて、繁りに繁りたる社會とはなれるなり。古代の社會は、實に事物も智識も、共に未開に狹小に單純に不完全に幼稚なりしなり、人の思想のみが、いかでか未開ならざらむ單純ならざらむ幼稚ならざらむ。古代の歌謠を成せる思想の單純に狹小に幼稚なる事は、正に然るべき道理ならずや、怪しむに足らず。古代の歌謠の思想は、誠に斯の如く幼稚なりけり、されど其の詞は眞に實情より出でたり、實情の自ら溢れ出でたるものなり、故に其の情や切なり、切なるが故に、其の思想の幼稚にして至らざる所を、能く補へるのみならず、反て其の思想の幼稚なる所のあはれにおもしろくおぼえしむるが如きけしきあり。歌といふものは、元來幼げによめるが、何となういふにいはれぬあはれさのあるものなり、餘りに理屈こまやかに、理論たくみに、言葉したゝかに詠みすゑられたるものは、反て餘情おぼえず、餘韻きこえず、さまでに面白くもあはれにもおぼえざるものなり。されど歌は幼げによむがよしとさへ、古人もいへるならむ。古代の歌

のあはれなる所は、蓋し此のあどけなきよみぶりにころ多からめ。

いま一つ古代の歌謠の心に就きて、いふべき事あり、ろは何となう快活に樂しげなる氣色の見ゆる事なり。當時の文學界の流行語にていはゞ、即ち樂天主義ともいふべきけしきの、一般に歌謠を通じて見ゆる事なり。彼等泣かざるに非ず、恨みざるにあらず、然れども其の涙も其の恨みも、何となう男らしくして、決して世を厭ひ身をはかなみ、女々しげに泣きも恨みも爲す如き事はせざるなり。我國上古の人は、所謂樂天主義の人なりしなり。

彼等は、唯上には美なる皇室あり、四方には美なる山河あり、遠近には美なる草木魚鳥あるを知れるのみにて、他に彼等は知る所も願ふものも皆無なりしなり。故に彼等には、此邦土は實に無上の樂土なりしなり。此人世は實に無上の樂境なりしなり。故に其の情をうたふを見るに、皆樂しげにして、一片の此邦土を厭ひ、この人世を厭へるものあるを見ず。海をゆくも、山をゆくも、戰場にむかふも、死に臨むも、起ても居ても、毎時能くたのしげなり、樂しげに起ち、樂しげに働き、たのしげに進みたり。極めて快活に、極めて進取の氣性に富める人なりしなり。此の上代の人の氣性のままにて、進みたらむには、いかでかり疾く、いかでかり進みたりけむ。惜しいかな、佛教の入り來りて、頻りに人世の無常不定を說き、頻りに人世を厭惡塲裡となげき、鳥部山の煙の、げに心細げなる限りを說きたてしかど、邦人の固有なる快活進取の氣性は、殆んど一變するに至りたるなり。これまた佛教の我國に及ばしたる一大害なり。



歸家日記（つゞき）

故人　井上通子　遺稿

堀田璋左右　寄贈

十四日、明がたにやどりを出つ。家々旅人の朝たつけしきしるく、女どものたち出送るなど見ゆ。馬どものいはえわたしたるに、殘りの夢もさめぬ。浮島が原に出て、

　不二のねは夏なき山か吹おろす
　　朝かぜ寒しうきしまがはら

江戸を出てより、日ごとに見やらるゝ富士の高根の、うすみどりにて、たぐひなき山の姿の、はるかに雲を出たるが、我ゆく方に相向へる心は、かしこにのみ、あくがれつゝ、今日はいとゞちかづきもて行まゝに、はれぐ〵しく目をろらになして、時志らぬと昔の人の詠めけん雪さへ、今も見ゆれど、其よふることもいと床し。

　いづくよりふる白雪のつもりけん
　　雲もおよばぬ富士の高根に
　降かふるほどやきぬらんみな月の
　　もちにもちかきふじの白雪

仰見士峯高倚天　雲端玉立德容鮮
千秋雪色映東海　一抹烟光讓淺間
神秀豈爭他列嶽　仙蹤猶在我危巓
鄕人若問途中事　好把此山比聖賢

高根よりこなたに、横たはれるは足高の山といふ。かく名高く、はれぐ〵しきわたりに、いかではひよりけん、とをかし。富士山神蹴くづし給ひたるとか、かたはになりては、たてるかひなくこそ。けふは日照てい

と暑し。峯のごとくなる雲とはく見ゆれど、かげらふべくもなし。

やくかごとくるしかりけりみな月の
てる日をさへよ夕立の雲

足柄山に雲のかゝれるも見ゆ。

よろにして過行せきの跡なれや
雲のみみゆるあしがらの山

富士河のみなぎり渡る水いとはやくして、あやうげなり。

富士河のみなぎる浪は時しらぬ
高根の雪も今やとくらん

其後また少しちひさき河をわたる。是を問は、うる井川といふ。蒲原、由井をすぎて薩埵山をこゆ。中比まで此あたりこよなうけはしく、かたつかたは壁のごとく、立たる山のかたつかたは海にて、唯はろき道一つなれど、人も馬もわづかに、心とり／＼ならでは、とほり難し。おやしらず、子しらず、とかいひて、れやことといへど、相かへりみる事あたはざりしといふ。しかるを近き世に、此山をかくひらきたひらげさせ給ひて、萬の人のゆきかひたやすくなれるは、道廣き御めぐみなりかし。田子の浦にしほたるゝあまたの家どもまどらに、あやしげなる戸口より立出て、磯邊にながめ居たる、汐汲むとにやと見るに、さもせず。貝拾ふにこそ。げにさま／＼いとまなきしわざもあはれなり。沖津にいたり、清見かたを過て、こゝは昔の人の心とゞめしから歌、やまと言の葉の、すぐれてたへなるおほけれど、中／＼拙き言の葉の見苦しからむをど、打よする沖津なみもすゝぎがたくやと引こめて、たゞみし人の面影とめよとひとりごとして、過侍るまゝ心のうちに、

いのちあれどけふ又こゝにきよみ潟
浪たちかへる汀をも見つ

とぞ、ふとれもはるゝ。清見寺の門の前におろしたてゝ、しむしいこふ。ますもとよりきて、寺に入てみ給はんや、いとよき景色也など聞ゆれど、のぼる事もむづかしけれど、此すだれでしにわづかに門よりみいれ侍るのみ。むかひの家々膏藥うる所おほし。これよりなほ山路をわけ行に、三保の松原はるかにみゆ。あまつ乙女の羽衣かけしといふあたりもゆかしく、げにや天人もかけりつべき所のさまなり。

山行直下海邊好　三保松原與浪連
仙女羽衣空去後　斜陽掛處憶翩躚

うとはまの疎くは人にみゆじとや
　たつ白浪のまなくよすらん

伊原川とかいひて、ちひさき川わたる。江尻にいたりて、宿をかる。

十五日、江尻を出て、狐崎を過て、梶原がむかしをかなしむ府中より、まりこに行くとて、あべ川といふを渡る、しづはた山をみて、

なつ衣たれきてみよとをりはへて
　賤はた山にかゝるしら雲

鞠子河の橋わたりて、宇都の山にのぼるほど、待らんさとを思ひやりて、

古郷のれやの夢にやかよふらん
　けふこえかゝるうつの山みち

すぎやう者にことづけゝんはるけきいにしへのあとゝおもふもなつかし。

つたかへでろれとはなしに夏草の
　こずゑもしげるうつの山越

坂くだるほどに、十團子といふ物を、家々の軒のつまにかけならべてうる也。しときのちひさき丸を十づゝ、いとに貫ぬけるは玉を綴りたらんやうなり。旅人買もていきてわらはべにとらするとぞ、はかなげなる物からする事にて、今にかはらぬさまなるもあはれ也。晝

たちよるやどは岡部なり。

うつの山ふもとに秋のちかければ
露もをかべの里といふなり

せとの染飯とて、ずさども取もてり、藤枝ときけど紫匂ふ花もなし。島田を志して行、早苗のみどり色まして、見るまゝに秀ゆくを、輿かく者どものがたちいふをきけど、今年のなりはひころいとよく侍れ。雨風の時に合ひたるなるべし。刈をさめん秋の稲穂もたのもし、かくゆたかなる年に逢侍らんは、我等か幸なりとよろこびつゝ行を、きくもいとうれしく、めでたく、きゝわたる大井川にもいたりぬ。頃日は水あせ石出て河原のみれはく續きて、なは廣く見ゆ。さいつ頃、長雨に、島田金谷まで、ひとつになりて、水のたたへたるなど、かたるをきく、さらん折のさまおもひやるもいとおそろし。瀬ふたつ渡りて、むかふの岸に着ぬ。

東路のなごりはいとゞ大井川
このせや渡るかぎりなるらん

今宵は金谷にやどる。日は入りぬれど、なほ暑ければ庭に水そゝがせなどして、さうじあけて見出せば、月いとよく射入て、たびの空にもれとらぬ影あはれなり。つき山のかたをくらく茂げりたれど、もりかねて人だのめなるにも、すみこしかたのみ面影にたつ心ちして、

いとゞなほ月に昔を思ひ出て
すみこしかたの影ぞわすれぬ

よしあしもおもひわかれず、鈴本にも此月のおもしろくあはれなるに、詩一つ作れと硯さし出て、すゝむれど、馬上にていたくこうじはて侍れば、ゆるし給へ、其かはりにはとて柏子とりて、三井寺うたふも珍らしく、面白し。はやくまどの内にすみける程、をりをり聞しが、其ころはまだわらはにてぞ有し、うたふ聲もねびまさりて、年月の隔りしをいとゞ思ひしらる。源氏物

語ぞ猶ねんにれも白きといへど、半蔀うき舟など謡ふ。きくもわかぬずさども、はやくいね給ねかし。明日は又とく出たちなんをと、おもふべかめれどとて、新しき夜のさまかなといひつゝいぬ。

十六日、かなやの宿を、菊川と聞も、其かみの事、おもひながさるゝわたりなり、佐夜の中山にかゝりては、まづいのちなりけりといひけん、げにさこそありけれ、我も武藏野の露とやきねんと、いとはかなく心ぼそかりつる身の、十とせぞかりのほど、つれなく過し月日の、けふまた爰を經てふたゝび古郷に歸り侍るにつけても、なほ過させ給ひしきみの御言の葉のみ、かずかず思ひつゞけらるゝことおほくて、袖のみぬるゝ折しも、村雨さへふり出て、木々の下つゆも所せく落そひたり。

　雨さへやかさねて袖を絞るらん
　　ふりにしかたをしたふ涙に

　むら雨の過行跡を山かぜの
　　はらへど落る松の下露

　かりねせしふもとのさとの草枕
　　夢ぞのこれるさよの中山

なほ險しきをのぼりくだるに、このたびは日坂といふ、蕨もちひいへどとにうるは、西山の飢をたすけんとにや、むかしより其所の物となれるをど、何にまれかふものなりとて、をのこどもはくふめり。掛川にいたる、是は井伊伯耆守殿の領しさせ給ふ所なり。大手の門などきらきらしく見ゆ、此所の北の方は、故君の御妹の姫にてわたらせ給ふ。あづまにて近き頃まで見え奉るたびには、いと御なさけ有て、おほせられつる事ども思ひ出奉る、晝袋井といふ所に、しばし立寄てやすむ。さきにのり物のすだれの前にはしり行く歌うたふ者あり。物狂にやとみれど、皆いふを聞どかれかやうに乞食しても、親をど養ふ、我等にはまされり、孝

の志をかんじさせたまひて、此わたりを過給ふ、國國の君などまで、御覽じつけて、かくときかせ給ふは、みな物たまはらせ給へど、このさとの内をはなれずして、をや子のもの心やすくて、過しぬるなどいふをききて、あはれなれど、物とらせて過行ぬ、誠にをはくの行かふ人、貴も賤もおやに孝なると聞て、かんじて物とらせ給ふは、民のつねをとれる、此懿德をよみすとかや、いとたうとし、見附に往くほど橋どもをはく渡る、坂も亦多し。

　人しれぬかよひ路ならむ東路の
　　みつけの里の名をやいとはん

今宵は濱松にやどるとてゆく間に、天龍川ふたつ有て、まづ舟にて渡る。水淺くて、船行なやみければ、皆おりたちて、舟どもをとらへて、おし出す、やをらふかき所に浮み出て、心よく渡りぬ、後の河は徒わたりなり、鳳凰臺に題せし詩を思ひ出て、をこがましけれど、

　天龍河上天龍去　龍去河留二水流
　二水中分成大小　小斯厲揭大斯舟
　（詩匏有苦葉篇、深則厲、淺則揭、）

池田の宿とかや、長者のすみけんむかしの跡も、此ちかきわたりときけど、ゆやが言の葉をもひ出て、

　我もまたなれしあづまのはなの春
　　春におくれて今かへるなり

橋ども有てわたる、はま松にやどりぬ。

　はま松のかはらぬ色をみても猶
　　かれにし君が陰ぞかなしき

なほかゝるすぢの事のみ、先ふとうちおぼえらるゝままに、

十七日、明はなるゝほどに、宿を出つ。前坂といふわたりを行、新居へとて今切のわたり舟よせてわたる。風いとはげし、ほどなく岸にいたりつきて、爰にても又番し給ふ所によりて、御印奉り、例の女よび出て、

我もぐせる女も、髪ねんごろに見せて、いづくもたがひなしとて、益本が妹の名などたづね聞て、とはし給つ。濱名の橋は名のみして、今は渡るべき橋もなし。松左り右にうゑられたる山道をゆく、高師山もこゝなり。

高師山松ふく風のおとゝはく
きゝし濱名の橋も絶にけり

白須賀といふあたりを過れど、なほ山路なり。汐見坂をこゆるに、とほつあふみの海原はるゝゝと見わたされ、景色いと面白し、晝のほどしばし休む所、二川といふ。吉田の市店を過ぎて、いと長き橋に至る、唯今渡るはしやうゝゝ古くなれりとて、作りかへらるゝなり。大きなる木とも引かけ、けづりまろぜして、たくみどもをはじめ、人多くつどひて、どよみあへり。いま渡る橋にも、人々集りて、是を見る。御油より赤坂にゆく、客亭いとにぎはゝしく立並びて、家々の女どども旅人を呼いれ、とゞむる聲喧し、小田の蛙の夕暮になく心地す。

强呼ニ旅客一家々女　粉面朱唇巧納レ交
寓舎今宵何處好　共言レ有ニ美酒嘉肴一

今宵は赤坂にやどる。あるじの女房すきものにて、我何となく硯にむかひて物かきすさむを床しがりて、人靜まりて、若き女の宵より來りて、つかふるに案内させて出きたりぬ。なにやかや物語りして、手習の反古どもをせちにゆかしがれど、詩や歌や書てやる。喜ぶことかぎりなし。其身の有樣など、はやうかゝる事ども及ばずながら、心よせ侍べるを、思の外なるようすがにつきて、かくかしましき市の中の住居はいにもあらず思ひ侍るなどいふ、れやの里はいづくぞといへど、三河の國八つ橋のあたりと答ふ。今もむかしの跡はありやと問へど、八つ橋の柱にやかたへに殘れるを、其跡と申つたへ侍る業平の塚も侍とかたる。業平はろて

にて終り給ひしともみへざめるを、さる人の通がてにながめ給ひけん跡なれど、後のよまでのしるしにしれき侍るにやと思はる、や丶ありて歸る、鳥もほどなくわかつきを告渡れど、起出て、

十八日、例の明ぼの丶ころはひやどりを出つ、よべの女ども名殘惜めり。藤川と言里の名を聞渡りて、岡崎にいたる。この國の御城うるはし。今見る驛亭長くつづきて、町たてわたしたるあき物する家ども、さまざま行かふ人のめとゞむべき物どもかざり置て、いみじうにぎはしきわたりなり。矢矧をすぎて、よべ聞し八橋もちかきほど丶きゝて、

いにしへの跡とみかはの八橋に
　その名ぞかりを戀やわたらむ

池鯉鮒より鳴海にいたる。

はま楸しをれしたびの衣手に
　うたてなるみの浦風ぞふく

日頃むつましかりつる女どちのあたりもなづかしく、はるかにへだ丶りつるかな。又いつか逢見るべきなど、思ひ出るに音もたてつべし。

別こしほどもはるかになるみ潟
　なきて千どりの友ねたふなり

今宵はあつたの宮の逆旅にやどかる。小刀やうのものもてきて賣る者おほし。　（未完）

婦人の德

故人　貝原益軒

家をよくたもつと、保たざるとは、夫の德不德のみにあらず。又妻の行の善惡によれり。古人家貧うして良妻を思ふといひけんも、むべなり。夫は外を治め、妻は内を治むるが職分なり。夫よく勤儉なれども、妻もし放逸にをこたりてつとめず、をごりて儉約ならざれど、家をたもちがたし。殊に貧賤なる家は、ひとへ

に妻のちからによつて榮え衰ふ。夫はつねに内に居ずして妻のしわざを知らず。只妻にまかせ置きぬ。しかるに、妻不徳なれば、財を失ひて必家をやぶる。故に上下以下庶人の家をほろぼすは、多くは妻のとがなり。いましむべし。妻の徳は、つゝしみてをごらず。夫としうとにうけしたがひて、わがまゝならず。もはら家事に心を用ゐて身をへりくだり。女工をよくつとめて、おこたらざる。これ婦人の徳なり。かくのごとくにしてよく家をたもつべし。夫となれる者は愛におぼれず、必婦に教へて家を治めしむべし。

小兒のしつけかた

全

およそ小兒を育つるには、初めて生れたるとき、乳母をもとむるに、必温和にして、つゝしみまめやかに、言葉すくなきものをえらふべし。乳母の外、付したがふものをえらぶも、大やうかくのごとくなるべし。初て食を喰、ものをいひ、人のおもてを見て、悦びいかるいろを知る時より、常に其事に随ひて、時々をしふれば、やゝおとなしくなりて、いましむる事やすし。故にいとけなき時より、早くをしふべし、もし教へいましむる事おそくして、あしき事を覺え、見習ひ聞き習ひくせになりひが事いできて、後、をしへいましむれども初めより、心にしみ入たるあしきこと、心のうちにはやくあるじとなりぬれば、改めてぜんにうつることかたし。たとへば小兒の手習ひするに、初め風躰あしき手本を習へば、後に能手をならひても、うつりがたく、一生改り難きが如し。第一いつはれる事、次にきずゐにて、ほしい儘なる事を、早いましめて、かならずいつはりほしい儘なる事をゆるすべからず。やんごとなき大家の子はことに早くいましめ教へざれば、年長じては、いきほひ強く、位高くしていさめ難

し。凡小兒の惡く成ぬるは、父母乳母かしづきなるゝ人の教の道しらずして、其惡敷事を赦し隨ひ譽て、其子の本性をそこのふ故なり。或は暫く泣聲を止んとて、あざむきすかして、姑息の愛をなす、其事まことならざれど、別て僞りを敎ふる也。又たはむれに恐敷事どもを云聞かせ、より〳〵おどしいかれど、後におく病の色と成る。武士の子は誠に是をいましむべし。いうれい、化物あやしく、誠なき物語必いましめて聞しむべからず。

或は小兒の氣にさかひたる者をど、理を曲げて、小兒の非をそだて、そらうち抔すれど驕慢の心出くるものなり。小兒をもてあそびて、我心をなぐさめんが爲に、樣々の言葉にて、そびやかし、くるしめ、いかり爭はしめて、ひがみ曲れる心をつけ、むさぼりねたむ志を引出す、しかのみならず、父母の愛すぐるゆゑ、あまへて父母をおそれず、兄をないがしろにし、家人をくるしめ、萬ほしき儘にして、人をあなどる、いましむべき事を、かへりて、すゝめ、咎むべき事をかへりて笑ひ悅び、いろ〳〵あしき事どもを見きかせ、いひ聞せ、しならはせて、やうやく年長じ、知惠出來る時に至りて、俄に、初ていましむれども、其あしきならはし、年と共に長じ、久敷ならひて、その本性とひとしくなりにたれど、いさめを用ひず、いとけなき時に敎へなく、年長じて俄にいさむれども、隨はざれど、本性惡敷生付たるとのみ思ふ事いとおろかに、まどひのふかき事ならずや。

むすめを嫁する心得

故人　仲文敬甫

胡安定先生のおもへらく、むすめを嫁するには必ずその家われよりまさりたる方なるべし。よめをとるには必ずその家我にしかざるものをとるべし。さあれど、

むすめのよめづかへよくいましめ謹むものなりと、互にかく心得なむ、嫁娶も時を失はず、親族も長く和ぐべし。されど、白樂天が詩にも富家のむすめは嫁しやすく、嫁する事はやけれども、その男をかろしむ。貧家のむすめは嫁しがたし、嫁する事遲けれども、しうと、しうとめに孝ありと作れり。男をかろしむる事、すべて女に相應しからぬためしなり。むすめをあなどらせじが爲に、我より劣りたる家に入ること、子を愛するに似て愛する道にあらず、かへりて疎るべきもとひをまねくなり。よめの力をたのまむために、我よりまされる家にもとむるは、ひとへに利に惑へる志なれど、さらにまた言ふにもたらず。女はたかきも、いやしきも、たゞをとこにしたがひ、しうと、しうとめにつかふるものなりといふ一筋の道にふみまどひて、利欲におもひつき、富貴をたのむかたらひの行末、はか〴〵しからざること、むべならずや。

重陽

井上頼文

九月九日は、月と日と九陽の數あへるが故に、重陽とはいふ。此祝ひごとも漢土の事に習へるなり。昔は天皇、南殿に出御ありて、節會行はる。上達部、親王たちをはじめて、其道の人々探題たまはり、文作り、文臺にすゑて、講ぜられ。菊の宴とて、群臣に、菊酒を賜ふ事などありき。俗間にも、此日菊花を瓶にさし、菊酒をのみて、親しきどち栗を贈りなどする故に、菊の節句とも、栗の節句ともいへりしなり。抑菊は盛り久しく、花の色香もきはことなれど、齢を延ぶる一くさのもてあそびものとなりて、着せ綿の露のしたてて、おもてをのごへど、老のしわをものぶむかりにいひはやされしより、その節句のいとなみは、公私ともにすたれはてたる今の世ながら、その花をめでたゝふる事は、いにしへにもほと〳〵立まさりたり。さるは、

そこの庭にも、かしこの園にも、さるかたに植ゑれはし花のかたち、大きくも、又一本に花數あまたさかせなどしてきそひあひ。又かゝるわざもてなりはひとせる人だちは、珍らかなる物のかたちを其花して造りたて、見る人の目をよろこばしむる心たくみなどは、花壇の雨おほひよりも露すきまなきこととなるべし。

和歌の德

鹽井ふく子

學問をなすは、もと、人倫の道を行ふを以て根本とす。其身を修むることを得ずして、徒に、万卷の書を讀みたりとて、何の甲斐かあらむ。和歌とても、もと、學問の一種なれど、たゞかりそめの藝能として、徒に詞を飾り、筆を弄ぶべからず。花鳥風月をあはれといふも、深く心に感じたる所あれどなり。さるに、こゝろは荒々しくして、つゆ物のあはれを知らず、浮世の塵に穢がれて、やさしき飾なく、唯古人の口眞似して、詞をうるはしくすとも、なか〳〵に、輕佻浮華の跡見えて、まことの歌にあらず、またまことの歌人にもあらず。歌の德は、もと人のこゝろをやはらぐるにあり。優にやさしき心ありてこそ、はじめてまことの歌人とは云ふべけれ。昔大納言何某姉君、重陽の酒宴をひらかれけるに、折から、座敷へ蜘蛛の出でけるを、婢女の扇もて、打ち殺ろさんとなしたりけれど、姉君見とかめて、そと紙に包みて、庭に放ちやるべし、ゆめな殺しそといはれけるに、婢女申すやう、仰せはさることながら、そのまゝ放ちなど、蜘蛛は數多の子を設けて、此後いよ〳〵はびこり候はむとて、なほも打ち殺ろさむとするを、姉君はなほかたく止め給ひて、蜘蛛はさゝがにとて、妾ら和歌にもよく讀みて、めでたきものなり、如何に子を生めどとて、何か苦しからむ。此の後、何處に見るも、かならずな殺しそといはれけ

るに、婢女もそのやさしきこゝろに感じて、それよりは殺さずなりたりとか。あはれ優にやさしき心ばへならずや。おのれ一人のみならず、あらあらしき下衆の女をも感化して、やさしき女性の道をふましめぬ。和歌の徳も亦大なるかな。

筆のすさび　たけを

一

われは顔こそいと見にくきものなれ。男のわれは顔もいと片腹いたくいやしきものなれど殊に目立ちて見ゆるも胸わろき心地せらるゝは女のにこそ。さるにてもやさしかるべく美しかるべき女のなどてかゝるあさましき顔するならむ。よにはわざとこの顔を好みてみづから美しき面を汚しつまはじきせらるゝ女あるはそも何と思ひてならむ。其の心のうちこそ心得られね。何のわきまへもなく賤しきわざする女どもの顔よしとてよき衣きたりとてわれは顔するはことごとしく咎むるにも足らざれど唯見のがしがたく見ゆるしがたきは學問したる女のわれは顔學問したりとてわれは顔する女

二

木傳へばおのが羽風にちる花を
　たれにおほせてこゝらなくらむ（古今集）

我が身に出でたるあやまちを人に責め我が身を顧みずしていたづらに人を怨みさては天を怨むものこの歌をよみて何とか思ふ

三

ばうふりや蚊になるまでの浮沈み、

あはれ浮世の海には不運の風多く困難の波荒し、我等は五尺の船を以ちてこの荒海をおし渡る。浮沈は常のみ。時に不運の風に襲はるゝともかなしむこと勿れ。時に幸福の波に浮き上るとも喜ぶことなかれ。唯忍耐を柱とし謹愼を梶とたのみて怠らず撓まず其の風を凌

ぎ其の波を破りて目ざす目的地に達せむのみ

人をもてなすに就きて

白魚女史

行末永くまじはらむ、しば／＼おとづれられむなど思ふ人の、わが宿に來りし時、殊更に席を排へ、珍味を列らねなどしてもてなすは、こゝろいたらぬ人の爲す業なり。あまりに響應すぎては、なか／＼に、人も氣の毒がりて、五度こんとおもへるも、三度になり、二度になり、一度になり、終にたえ／＼て、まだく忘らるゝにいたらむ。何事も取繕ろはず、あるにまかせてもてなしたらむころ、したしみを久しうする道なれ。昔穗積氏の老母、京都の高臺寺といふ所に、隱居して昌貞尼と稱へ、世にたぐひなき風流をつくし、庭前十畝ばかりを柴として、苅ることなかりき。ろは蝶を招かむ爲めなりとか。世の人これを取り殘しの柴と呼べりといふ。この老女、又日毎に鶯の來りて、鳴くをよろこびて、これをなほ久しう止めむには、梅なくてはあるべからずとて、洛東にもとむれども、心に叶ひたる古木なければ、人を數多雇ひて、處々方々と探り求められしに、漸く／＼にして、嵯峨と云ふ處に、老木の大いなるがありと聞きて、金錢をいとはず、購ひもとめて、庭園へ栽ゑさせたりけるに、鶯は返て驚きたりけむ。ろの梅を植ゑたる日より、いづちともなく、飛びゆきて、終に來ずなりたりとかや。あはれ、あまりにもてなし過ぎては、反りて親しき者も、うとくなるもとなりけり。

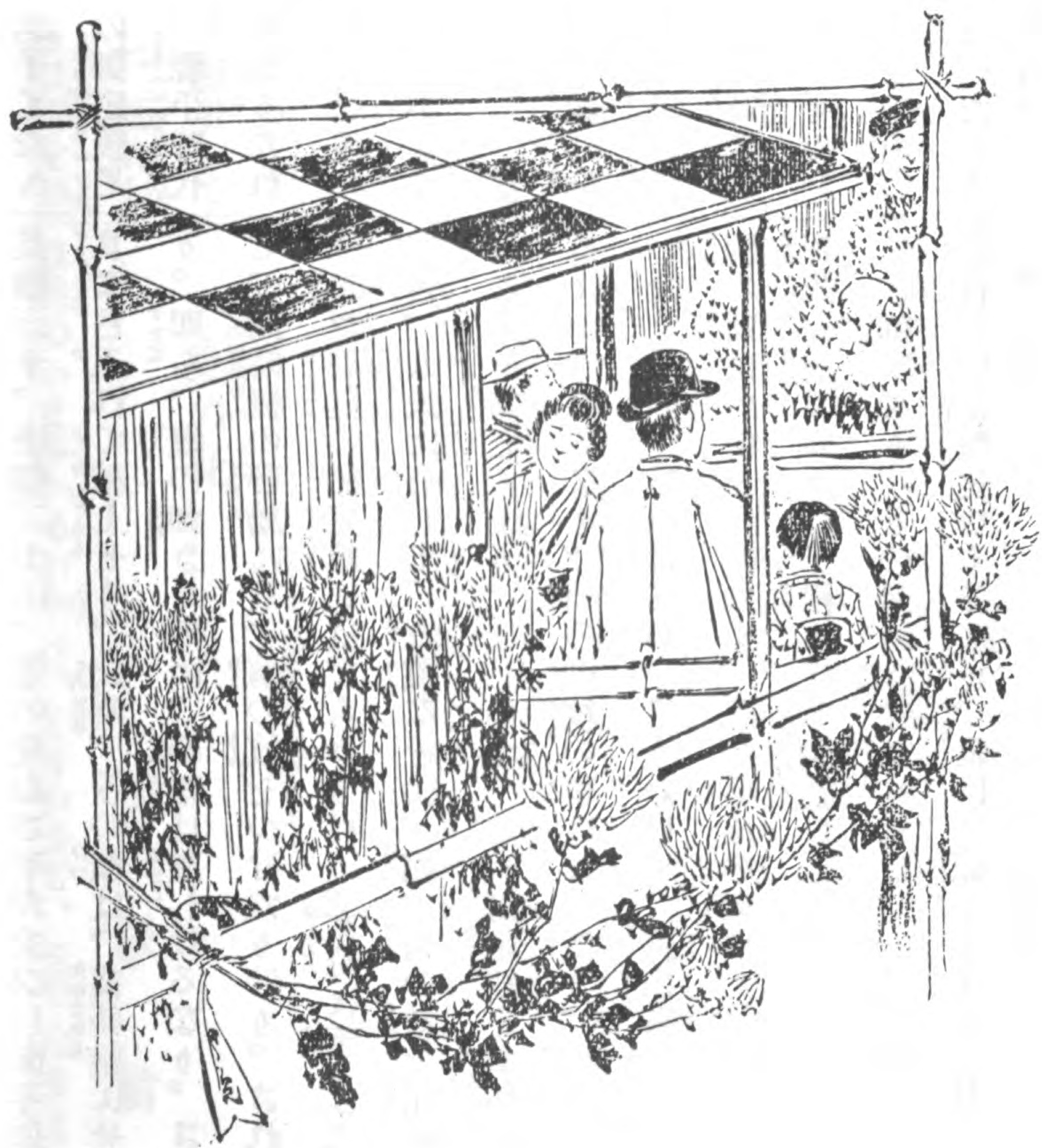
菊の花

壚汲翁

草花のいと多かるが中に、とりわきて、めでたきは、菊の花なりけり。西ふく風さむく、もろ／＼の秋の花

しぼみはてたるころ、ひとり秋陽にはひて、露霜に徹る姿のけだかさ。げに、古の人が花の隱君子とたゝへけるも、うべなりけりな。この花の朝廷の御定紋となりけるも、かゝるめでたき花なれどなり。源平時代より、この花を、紋などに用ゐたまひしことありたれど、未だ御定紋とはならず、人民も亦用ゐたり。その御定紋となりしは、文錄の頃なりけり。今そのあらましを記さむに、天正十五年、秀吉の聚樂邸落成し、當時のみかど、後陽成天皇の行幸を仰ぎまつり、數日御滯留の間、くさ〴〵のなぐさみを叡覽に供し、海山の珍味を供へて、もてなしまつれり。さて、この時御用に供へまつれる机、硯箱、盃など、みな唐風のものを用ゐて、たえて蒔繪のものは用ゐざりけり。この頃の蒔繪は、天正蒔繪とて、我國の蒔繪の最も衰へたる時代にして、その蒔繪拙けれど、貴き處には、蒔繪を用ゐざるなり。盃、硯箱など、上等の物品にて、高貴の人の用ゆるものは、すべて唐風なりけり。還御の後、長櫃三十、唐櫃二十に、帝の用ゐさせたまひし御手道具など入れて獻上せり。此時、その櫃は、高蒔繪にせり。即ち、櫃の如きものに、蒔繪は施しけるなり。さて、此時櫃の蒔繪には、菊の紋をつけたりけり。されど未だ朝廷の御定紋とはならざりけり。文錄に至りて、秀吉、人民に令して、衣裳などに、桐、菊の紋を用ゆることを禁じてより、はじめて、菊が御定紋と判然するにいたれるなり。菊の御紋の事はさて置き、菊花もいたく賞玩されけるが、とりわけて、青山御所の御園の菊は、いとめでたく、その盛りの頃つかさびとの拜觀を許さるゝは、限りなき御惠にして、いとゞ辱なき御事なり。その最も大なるものは、一本の菊にて數百千の花輪をつくるなど、世には類すくなく、且つ築山泉石のめづらしく、げに雲の上の御園なり。いまは、奏任官以上の官人の夫婦に拜觀を許さるれど、も

と、その家族一同に拜觀を許されたりき。その時、翁も、拜觀しまつりて、老の目にうれし涙のみこぼれ、御園のさま、今なほ眼底に印せり。されど、いとかしこければ、くはしく記しまつるべくもあらず。廣尾の笑花園をはじめ、あまた園に、多く植ゑつらねて、秋のあはれを添ふるは、いとうれし。團子坂の菊とて、世に有名なれど、こゝは菊の花のすがたをめづるにあらで、菊の花、葉などにてつくりたる人形をめづるなりけり。いと俗なるものにて、菊の高潔の風韻は、また求むべからず。翁もしば〳〵孫の兒女どもに、そゝのかされて、見にゆきけるが、五六の菊園ありて、客をよぶ聲いとかしがまし。菊人形のさまは、芝居の舞臺を



眞似たるものにて、その顔手足は、普通の人形なるが、その衣服には、菊の花や葉を用ゐたり。されど、人形が主にして、菊は客なり。むしろ、その衣服も、普通の錦繍を用ゐたらむ、見苦しからざらむを。風流を解せぬ俗人は、如何にともすべからざるものなり。されど、團子坂の菊人形は、名高く聞えて、都の秋季の名物なれど、話種にとて見て置くもよかるべく、かへるさ、上野公園にまはりて、動物園など見、そこ〻すぞろあるきするほど、いつしか秋の日西に傾きて、狭霧たちか〻れる小西湖上の夕暮の景色、敗荷殘柳、秋、蕭索として都の空も、さすがに、うらかなしく、そゞろに詩興を動かして、こがね多くもたぬ身の、松田などに晩食たうべて、のこれるを、歸りて宿のつまにおくるも、亦仁なるべし。

末森山

柴田千稻

加州の金澤を隔つる事凡そ十里、能州七尾港に通ずる街道の左方に横はれる翠山を末森山と云ふ。路傍に立ちて之を望めど、古松に咽ぶ天風は蕭颯として昔を語り、岩間を迸る谷川は古を忍びて愁々として泣けり。あはれ三百年の昔、閃く刄の霜は、凄じき兜の星の光と映じて北風腥さかりし頃、此松ヶ枝を掠めて飛ぶ鳴鏑、此谷川に注ぐ血汐の雨、今は跡もなくをさまりて翠滴るが如く緑愈々青く、天雲を掠めて優に屹立するも、風は小笹を動かして梢に聲ある時、岩に雨摧けて澗間の流れ激する時、そゞろ人をして懷舊の涙を留めあへざらしむ。

此山は甞て前田氏の將奥村長門守が佐々成政の軍を拒ぎし所、先きに本誌に載せられて人々も記憶し給はん。長門守か妻は智、形名の妻に讓らず、勇、巴御前に劣

らず。夫を助けて奮戰し、遂に目に余る大軍を支へ得たりき。一度此山に登りて追想すれど、漆の如き黑髮を振亂して侍女等を勵し、或は粮を炊ぎ或は長刀を振ひし有樣、歷々として眼中に映り來るが如くればゆ。我此頃七尾の地に寓し、客窓の徒然遣る方なきまゝに、閑あれど一枚一鞋山河を跋渉するを以て樂となせり。先きつ頃二日ばかりの閑を偸みて、例によりて曉天に寓を出で、ゆく／＼路傍の勝地を探り、其夜は七里ばかりを隔てたる志浦村に宿し、翌日、朝霧を分けて末森山に登らんとて、細き狹き野路を辿りぬ。此所彼所のまばらなる民家より立登る朝餉の煙は風のまに／＼木立を迴り、誰を招くか穗に出でて打靡く旗薄、人目恥しげに頸垂れ伏したる女郎花、誰が脫ぎ棄てけん、露に萎るゝ藤袴、とり／＼に咲き亂れたる千種の花は、哀れに鳴き頻る蟋蟀の聲と共に、野も狹に別け行かん道もわかぬばかりなり。

倘行き／＼て野の盡くる所、田あり。田の畦を傳ふ事暫すくれどやがて小丘あり。登るべき道はあれども、只僅に山賤が枝を折り枯柴を搔き集むとて行き通ふのみなれど、道も荊棘に埋もれて、何處を目的と蹈み行かん由もなく、右になずみ左に逍ひ、汗は衣を浸して苦しさ云はん方もなし。



喘ぎ〳〵漸く半腹に至れど、右に斷崖あり。見下せど古松老杉遙かの下に梢をそろへて鬱々晝も暗きが如く、足下より蕭々として立登る山風は膚を透して湧き出たる汗忽ち乾きて、神氣自ら爽然たり。暫し草の上に横りて兩眼を閉づれど、心神自ら靜りて四邊寂寥、耳を襲ふものは僅に谷間を流るゝ細流の音と、風に叫ぶ猿の聲とのみ。

やがて起き上りてマッチを擦りて煙草を吹かしつゝ、杖を力に歩みはじめぬ。登るに從ひて道愈々狹く、群り覆ふ木枝に顔を叩かれ、蔓り出たる荊に袖を搦められ、頂上に至りし頃は足は疲れ息も絶え〳〵なり。よりて茲に息を休めて足を擦り胸を撫で、横はる事數十分、再び眼を開けど、松風梢を流れて懐に入り、此身は恰も空中に浮ぶかと思はれて、魂もいつしか飄々として松の梢の邊りを逍遙ふ心地す。

あはれ其昔し、此頂上に聳えし巍々たる城も移り行く世と共に、今は苔蒸したる礎にのみ名殘を留めて、生ひ繁れる熊笹の間に狐狸の戯るゝを見るのみ。草白うして寒月空しく霜を照らす夕、風黒く雨白く僅に殘る門の礎に水注ぐ夜、青燐松の梢に隱顯して、鬼哭神泣啾々として枯骨に聲あらん。我は懐舊の涙を袖に絞りて悵然として歌うらく、

いにしへを忍ぶ涙に掻きくれて
枯れたる草に村雨ぞ降る

此の城の趾の平らかなる所に踞して、提げし握飯を取出し、餓ゑたる腹中を肥しつゝ遠望すれど、一面の青田今は赤く實りて畦道を行通ふ人々の影は、恰も穗を啄む雀のむれ立ちたるが如く、此田を縫うて横に走れる數群の森の間より人家隱見し、羽咋今濱などの町々遠く近く、眼下に集り來る。尚遙に眼を放てど一帶の青山北より來りて其盡くる所に當來岬あり。蜒蜿として遙に海中に突出し、北海の激浪裂けて摧けて飛び散

る中に、木葉の浮ぶが如く漂ふ漁船數艘、蜑士の鹽燒く煙にやあらん、苫屋の間より霞の如く漂ひて沖に消ゆる白帆の影を追ひ、風景の絶佳なる事到底筆に載する所にあらず、心頓に恍惚去らんと欲して去る事を得ず、立ちては坐し坐しては立ち、此處彼處行き廻りて又元の所に來り、獨り奥に入り聲を放ちて古歌を誦じ、遂に日の傾くを知らず、慌てゝ山を下りて麥生の村に入り、其夜旅窓孤燈の下に眠れど、夢は末森山の麓を廻りて、彼の女丈夫が我に昔を語るに逢ひぬ。

九十九髪

桂月漁郎

（五）

瓜田に履を入れず、李下に冠を正さずと云ひけむ、げに、うたがはれ易きは、男女の間なり。平生、品行正しきも、この道ばかりは、思案の外とて、人は容易に承知せず。されど、古歌にも、陸奥に、ありといふなる、名取川、なき名とりては、くるしかりけりと云ひけむ、古の恨も思ひやられて、ほす由もなき濡衣の、よしや人にはそしらるゝとも、正しき心、正しき行は、神こそ知らさめ。れどろの奥にもなほ道ある世の中、思ふどち、すみなば、草のむしろも、などかつらからむとは思へど、あたら、望みある身の、花もさかさず、めゝしきことにかゝづらひて、一生を誤まらせまつらむは、心苦しく、また、まことに其人を愛する道にもあらず、一旦被むりしなき名をそゝぐには、これまでの事は、唯一時のうれし夢とあきらめて、ちぎりしことまでも取りけすの外あらじと、いさぎよく決心して、妾は今日までも、ひとり孤燈を守りぬ。

かく決心するまでの妾の心の中は、千々にみだれたりと云はむも、いまだつくさじ。決心してよりのちも、女心のめゝしく、雨のふる夜など、そのかみの事思

ひいだして、よもすがら寢もせず、むなしく袂をしばることもありけり。

あつく兄上の病をいたはりたまへるを見て、世にたのもしき誠心と、深く感じけるに、その看病の爲にとて、我家にやどりたまひしこと、反て疑をうくる種とならむとは、我も人も思ひがけきや。げに、世の中は、あざなふ繩に似て、禍福の伏する所、もとよりはかり難かり。川田の君も、心苦しく思はれて、我身はともかくも、一言の信はそむくべからず、また我身の故を以て、正しき貴女の名をけがすべくもあらずと、のたまへど、兄上しひて說きすゝめ、烏鵲、風冷かに、赤繩ながく絶えぬ。

この事きゝかじりて、薔薇はうるはしくても、なほ針あり、あの顏して居ても、もつたが病ひのいたづら娘、もらはざりしは、もつけの幸なりけりと、ひそかにのゝしる人の言の葉、きくにつけても、いと苦しく、月日はにゝには照りたまはぬかと、恨みしことも、いくそたび、中にはまた、若氣のあやまりは、誰れも免れぬ事、雨ふりて地のかたまる譬もあれど、またくすつべくもあらねど、賣物の身の疵は疵なり。さるにその疵物をいとはず、もらひうけんといふ心に免じて、承諾せずやなど、さかしらたちて、世話する人あるも、いと腹立しかりけり。

兄君はさすがに、思慮ふかくて、この後、緣談のことは、おくびに出したまはざりしが、老女の時は、敎育なき身の、思慮足らず、これが、祝言のすみしといふにあらず、夫としあふがるゝ人は、川田の君のみとも限らず、お孃樣のお顏立なら、お心だてなら、何處へお出でなされても、引けをとらるゝことならず。早くよき旦那、さがして、おかたづかあそばせやといはれ、人の心も知らで、つか〳〵物な言ひそと、覺えず口走りけるが、時を叱りしことは、あとにも、さきにも、

唯此時一度のみにて、折角の心づかひを、かくまで、あら〳〵しく言はでもよかりしと、後にて、ひそかにくやみぬ。

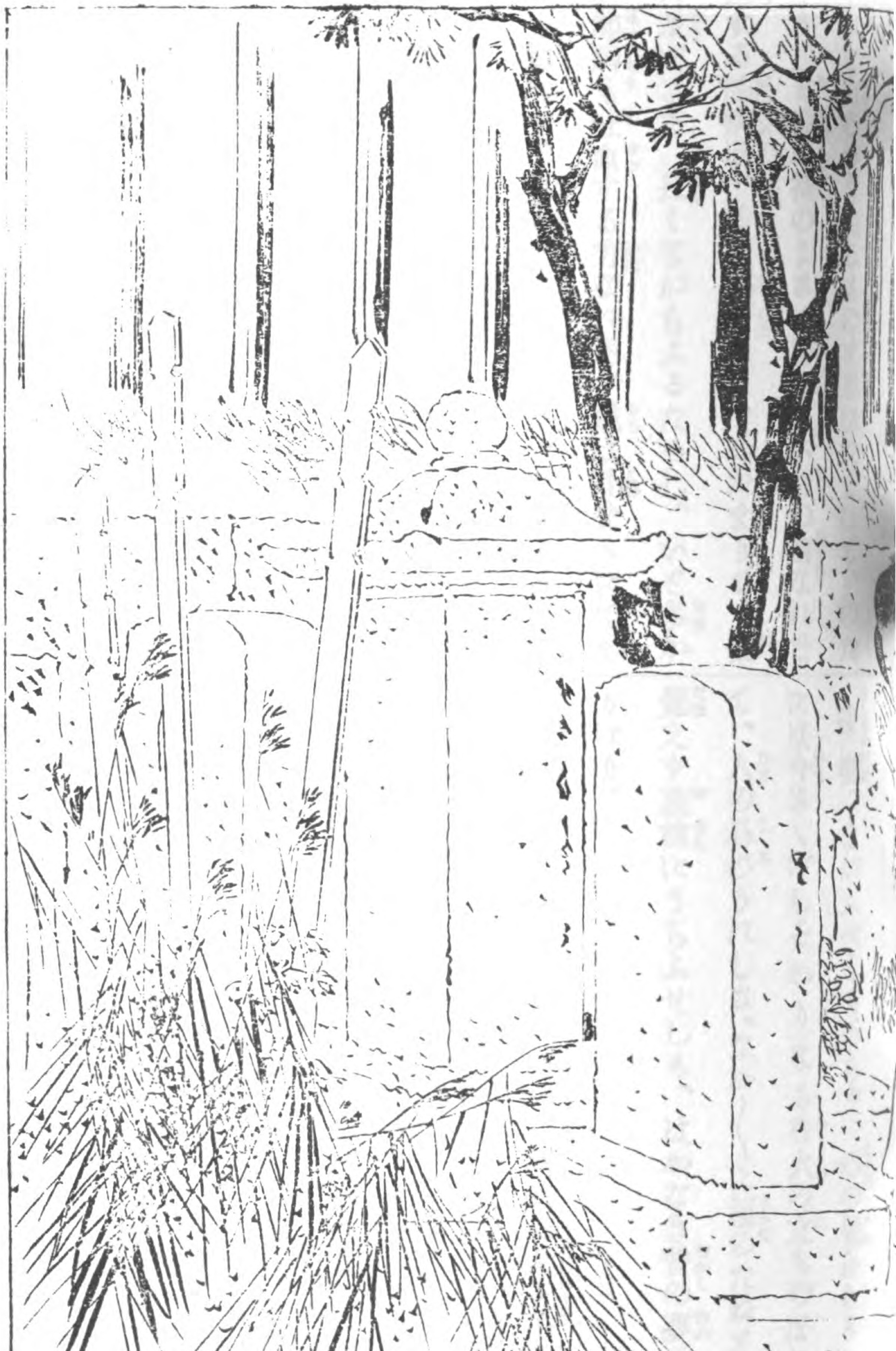
よしや、此世の緣の、うすくして、一夜のなさけだに、かはさずとも、兄君の許したまひ、おのれもそれと思ひし人をおきて、重きが上の小夜衣、わがつまならぬつまや重ぬべき。夢よりも仇なる世の中に、いづれか長くさめぬものあらむ。わが思ふ人の爲には、火水の中もいとはじ。口善惡なき浮世の義理に、恩愛のきづなをたちて、一生世をよせむ陰なく、あしがきの、へだゝりてのみあらむとも、思ふ心のかよひ路には、をちこちのわかちもあらず。たゞ、心の中に、君のおもかげを仰ぎて、此世の夢は結ばむと、思ひたつ日の足はやく、桑田、海とかはれる世の中に、四十年餘の榮枯得喪を閲みして、頭には霜をおき、腰はあづさの弓とまがりても、今にかはらぬものは、この心のみなり。

二年三年たつほどに、兄君は、學校を卒業したまひ、實業社會に立ち入りたまひたれど、腐敗したる世に、心にかなふ人なく、樂しきことは、少きものから、國の爲めと、しのびて、年を經しが、はからざる損害のために、家産多く失ひたまひ、風の心地と、うちふしたまひしが、喉より氣管支にうつり、氣管支より遂に肺に入りて、遂にたゝせたまはず、未だ三十路の坂も越えぬ身の、むなしく前途の望をもたらして、北邙一片の烟と消えぬ。

さらでだに、世にたよりなかりしに、兄に死別れて、今は血をわかてる人は一人もあらず、いつぞやのなき名は、七十五日とのたとへにもれず、またく世に忘られしのみか、此身まで人に忘られて、夢ならでは、うつゝに語らふ人なく、天老い、地荒れて、すだく蟲も諸音にむせびて、秋風とこしなへに冷かなり。

息絶えたまふ時までも、死期の近くことは知りたまは





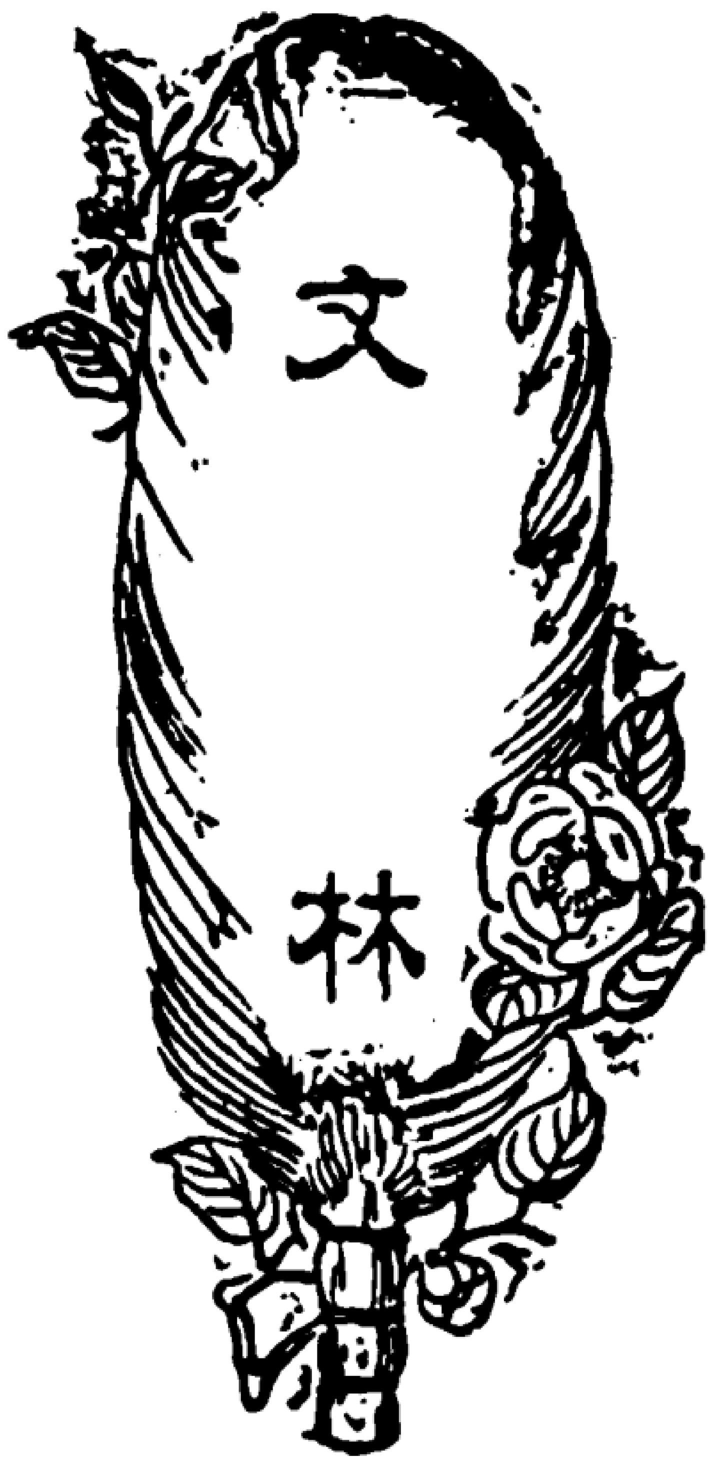
す、むくみを肉のつきたるものと思ひたまひて、のたまへるやう、日頃心持のよさ。肺病は不治の病なれども、吐血する肺病は、その場所にて、かたまりて、他の部分に及ぼさず、長くながらふるためし、いと多かり。わが肺病も吐血する方なれど、或は此まゝにてかたまるかも知れず。病癒えなど、また、亂雜なる實業社會には入らじ。御身を伴ひて、心のまゝに天下の名勝を尋ね、清風明月を友とし、平生好める筆とりて、天地の美をうつし、文人として後の世に名は殘すべしと、のたまひし言の葉は、長く耳にのこれど、身は早くも白玉樓中の人となりたまひぬ。また、何時の日には、筆とりて、胸中限りなき詩思を寫したまふべき。かきのこしたまひし幾巻の遺稿、なか〳〵に、かたみころ今はあだの思ひせられて、心やらむ方なく、ややく野邊の營をすまして、日毎に清き水を供へつゝ、四十九日に及びけるが、墓場に入る時、ふと認めたる後姿、まがふべくもあらず、心の覺えあるに、墓前には今さゝげしばかりなる香火の立ちのぼれるを見て、人の心のうれしさ、なか〳〵に涙のたねとなりて、覺えず墓前にうちふせしも、はかなき昔の夢のあとなりけり。

都の空は、すみうくて、時の在所なる此王子村に來りてより、こゝに四十年餘、時も間もなく、彼世の人となりて、あれたる草の舍に、おのれ一人すまへど、身にればえし讀書、習字、たちぬひのわざなど、村の子供にさづけ、心ある人には、また、生花、茶の湯、さて敷島の道など、をしへて、饑ゑもせず、こゞえもせず、今日まで生きのびたれど、最早世にある日は多からじ。思へど、浮世は長き夢なりけり。さるにても、川田の君は、今は如何になりたまひけむ。遠からずして、兩親はじめ兄君にあひまつりて、浮世の夢を語る時あらむと思へど、いとうれしうなむ。

明治六十一年十一月五日　春野玉子記

◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦

かく讀みさして、翁は、さても薄命なる身の上やとて、頻りに涙をこぼしぬ。ろも、この翁は、いかなる人ぞや。



山路霧　徳大寺實則

霧こめしやまのかげ道あさくれど
あしもとちかく鹿ぞなくなる

夜虫　東久世通禧

さはるべき物のひゞきも無りけり
更ゆく夜はのむしのこゑごゑ

山寺暮秋　毛利元德

淋しさのかぎりなりけり山でらの
あきのわかれのいりあひの鐘

田上鴈　近衛忠熈

小山田のおくていろづくあき風に
ころもかりがね鳴て來にけり

旅宿鹿　鍋島直大

鹿のなく聲もきこえてあきやまの
たび寐はことにおもしろき哉

秋社　高崎正風

秋風のふきそめしよりちゝの實の
おちぬ日も無きひえの神がき

名所菊　前田利嗣

大ゐ川きしのしらぎくさきみちて
かげゆく水も香ににほひける

月前笛　本多忠貫

さよ中に笛の音とほくきこゆなり
月にうかれてたれかふくらん

月前舟　池田政禮

釣びともかへさ忘れてつきかげの
きよきみぎはに舟つなくらん

水上月　水野忠敬

行かよふ舟もとだえてすみ田かは
いよよさやけき秋の夜のつき

籬菊　宮地嚴夫

君が代の千とせの秋のなかがきに
かをりそめたる白ぎくのはな

秋野　北郷久政

わりわけの月のひかりに秋の野の
千種のはなの見えわたるかな

初紅葉　岩崎勝從

松杉のみどりのれくにうすもみぢ
みそむるまでに秋ふけにけり

谷霧　三浦千春

伊香保山たに間のきりは出湯わく
けぶりよりこそ立のぼりけれ

中村博士の身まかりけるをいたみて　仝

をしまれて消にし露のたまは
のこるひかりやかたみ成らむ

鎌倉なる政子の墓にて　大畑弘國

たのめなき夢にちぎりて夢ならぬ
榮をゆめの世にもえしかな

鎌倉紀行の中に　龜谷行

由井が濱にもすそぬらして貝拾ふ
をとめが袖やすゞしかるらん

月前厂　三輪義方

久方のつきのさかりといをねゝむ
厂なきわたるよひ〳〵ごとに

海邊秋月　井上頼文

伊勢のうみの清き渚にみがかれて
珠かと見ゆるあきの夜のつき

雲外月　宇野豊道

松かせに吹はらはれてうきぐもの
はれゆくあとの月のさやけさ

海上月　永石徳文

すみのぼる月のみ舟のあたりまで
雲とみるべきなみだにもなし

山家隣　島津輯子

松かせを友とれもひじおくやまに
いほりならぶる人もありけり

朝秋風　鍋島榮子

しのすだれたれろして置ん朝な朝な
吹かせさむくあきふけにけり

秋雨　蜂須賀随子

くれなゐの色をもみぢに且見せて
しかのなみだとふる時雨かな

秋旅行　前田朗子

宿からんさとだに見えずゆふ霧の
たちれはひたる秋のやまみち

河邊菊　柳原愛子

立よりてをることかたし山がはの
いはねに咲るしらぎくのはな

田家見月　小池道子

足引のやまだのさとによもすがら
つきみる友はかゝしなりけり

秋月勝春花　鶴久子

花にのみうかれし春はあきの夜の
つきのあはれをしらぬなり鳧

谷菊　中島歌子

いかにしてひと枝をらん谷かげの
うむらが中のしらぎくのはな

菊映水　田邊和氣子

菊のつゆちりて流るゝたにがはの
すゑの里びと千代やくむらむ

名所紅葉　安東菊子

いその上ふるの山邊にあたらしく
そめし紅葉のいろのよろしさ

曉擣衣　仝

たがために誰れさ出てあかつきの
露にぬれつゝころもうつらん

川霧　内田遊歌子

かぢの音はなほきこゆれど秋霧に
舟は見えずもなりにけるかな

隅田川八景　霓裳子

一、綾瀬の秋の月

汀なるあきの梢のうつろひて、
にほへるみづにてる影の、
しろかねくだく葦のかせ、
浪もいろあるなかあきの、
月の夜ごろに見しひとや、
綾を川瀬の名にはたてけん。

二、石濱の雨の夕ぐれ

石濱の雨の夕ぐれきて見れど、
すだの渡りはしづかにて、
ことゝひにけん浪のへの、
むかしの影もかすむなり。
語らふ鳥もとたつぬれど、
こたへがほにも落つる玉水。

三、木母寺の春のいろ

紅のわかきの梅とちりにけん、
み寺のあたりはるくれど、
しるしのやなぎも萌む也。

露ときえぬといひおきし。
むかしの跡をしのびでゝ、
晴ぬ思ひにけぶるなるらん。

四、白鬚の櫻

長閑なる春のすがたのさくら花、
そよふく風にちりゆけど、
あたりの森はしろたへに、
しをりもあとも埋もれぬ、
み雪かつきかしらひげの、
梢を浪やこゆるなるらん。

五、關屋の落鴈

夕日影さすや穂のへの霧はれて、
つばさの數もかくれなく、
關やのさとになびきつゝ、
獨りしぐるゝかりがねは、
さえまさりゆく筑波ねの、
高ねおろしや身にはしむらん。

六、庵崎の春の曙

わがためは結びもおかぬいほざきの、
春のあけぼの見わたせど、
堤のさくらほの〴〵と、
にほひいでたる鳥のねに、
かすみにねむる月かげも、
今はと花の床はなれつゝ。

七、鐘が淵の歸帆

ありし音はひゞかずとても入相の
あはれは深きかねがふち、
あやめもわかぬみな上に、
くれわびにたる舟のほも、
かつ〴〵きゆる夕ぐれを、
ひとりつれなき梶のおとかな。

八、眞土山の雪

瓦焼く里のけむりもかきたゑて、
　こえゆく人のおともなく、
千鳥のこゑもよわるなり、
　とり集めたるさびしさの、
限りもみえずなりぬまで、
　まつちの山にふれる白雪。

八幡の崎にあそべる記（上總國夷隅郡小濱）

永石德文

わが里のわたりにて、景色よきところかぞふれど、まづ小濱なる八幡のみさきにおよびをぞをる。おのれはやくより東の都に旅居しつれど、ゆかしとは思ひわたりつれど、折もなくてえゆかざりしに、こたびかへりきて、なにごともなくこもり居けれど、今日ころはとて親しき友どちいざなひたるに、秋のもなかなれど、田かるわざにもやいろぎけん、ゐでしまちてよなどいふに、さらば又ころとて立出ぬ。

　ひとりゆく旅にはあれど八千草の
　　花さく野べはうきこともなし

とひとりごちて、大寺の里をすぎて、山路にかゝる、ゆきゝいとまれなるに、露ふかき小草はらふべくもればえず、尾花、葛花、女郎花は更にもいはず、數しらぬ八千草の花、ところせげにさきみちて、つたかへでさへ、をりしりがほに、もみぢしたるもをかしく、きゝなれし虫の音もところがらいとえんなり。小澤、中魚落などをへて、大原の驛にいたる。今日は例なりとて、商人つどひていとにぎはゝし。おのれ十あまり一つ二つばかりの程なりけん、父の君にともなはれて、此里にきたりしことありしに、今は家居いたくかはれる心地す。竹樓といふにいこひて、晝げたうぶ。いとよき宿なり、こゝを立出て、ゐでしゆくにむれあそべる童の内、かしこげなる童一人まめ〳〵しげにあないせさ

せよなどいふがまに〳〵、たどりゆけど、浪の音近くきこえて、いつしか八幡のみさきにぞいたる。城山といひて海中につき出たる山あり、さばかり高くもあらねど、道さがしく頂には八幡の神のみやしろあり、めぐりのときは木汐風にやふきさろはれけん、かたへにのみぞ打なびきたる、ゆき〳〵て社の後の方にいたれど、いと平らかなるところ一ところあり、げに此世の中ともおぼえず。みさくれど大海原いとひろく、立へだつる島山のかげだにもなく、沖つ白浪天つ雲ゐに打つゞきて、何れをそれともわいためがたし。

　　天雲のむかぶすかぎりはてしなき
　　　　海をこゝろのかゝみとはせん

足のもとは、けづれるばかりの崖にて、幾千ひろとも分かぬるを、五百重浪、千重浪打よせつゝ、くだけてかへるさまいひしらず。

　　れく霜のれけるいはほによる浪は
　　　　春さくはなとまがひぬるかな

　　うごきなき我もこゝろを比べなん
　　　　あら浪よするいはほに

こゝは我が大八州の東のはてなれど、海路の末は、やがて雲さわぐアメリカとやいはん常世の國なるべし。

　　いかばかりよせくる浪は荒ぬとも
　　　　やまと島根のうごくべしやは

などうめき出つゝ、興じけるほどに、ふとかへりみれど、小濱、日在の浦は弓なして、大東のみさきも、汐煙に打くもれるが、あからみたる夕空にうつり、犬吠が崎は遠くなみまにほのめきたるが、みる〳〵くれぬれど、今はとて、

　　旅ごろも重ねてもこん世のうさを
　　　　よろにてもれるこれの城やま

述懐

塩井ふく子

山よりも高く、海よりも深き、父母の御恩は、今更云はじかし。數ならぬ身をも、血を分けたる妹とおぼして、いと〴〵悲しがり、よろづ御心かけさせられ、かつ叱り、かつさとして、いたはりたまへる兄君の御心のほど、いと嬉しくて、言の葉にはえ言はじ。たゞ知らぬことを敎へられ、解しがたき文をこうぜられてだに、師の恩はいと深きものを、拙き身をかなしうればして、僅のひまに敎へ導かせ給ひ、暑き日、寒き夜、また煩らひたまひて、苦しき折り〳〵も、よろこびて迎へられ、ほゝゑみて敎へさせ給ふ、我が師の君の御惠の、ひとかたならぬに、一日巳れ見えぬとて、もしやいたつきにはあらずや、こゝろよりかなしうて誠に胸を痛むるぞなど、玉章して、とひこさせ給ふ、身にしみて、かたじけなく、ろゞろにいたづきの身にあることを忘れて、こゝろはをどるむかりになむ。こもりてのみ居てはとて、此度は必ず引きつれこよと、姪なるものに云ひつけおこし、車れこしなどして、必ずよく〳〵、姉とれもはゞなぞ、いとねもごろなる姉君の言の葉、御心いかでかあさからむ。歸りのほどの遲しとて、妹が婢女をもよほして出で、迎ふる志も淺からぬに、明日よりは叱ることなく、身をつくして、いたはりてむとれもふもをかしや。かゝる有がたき人々のなさけに、巳はむくひむ道も、言の葉も知らず、たゞ淚のみこぼれてなむ。

兼題

- 十一月廿日
  - 歌……寒草帶霜
  - 文……歌の添削を乞ふ文
- 十二月五日
  - 歌……初氷結
  - 文……靜の前の事を記す



●御救恤　去月十三日、茨城縣下多賀郡、大津町、火災に付、罹災者へ御救恤として、　天皇皇后兩陛下より、金五百圓を下賜あらせられたり。

●皇后陛下の行啓　皇后陛下には去し二十九日午後二時、御出門、青山御所へ行啓あらせられしが、同午後四時三十分、還啓あらせられたり。

●皇太子殿下の御快癒　皇太子殿下、肋膜肺炎に罹らせ給ひ、侍醫の方々は更なり、橋本宮中顧問官、ベルツ醫科大學教師等迄も、召させられ、御治療申上げたるに、其効空しからず、追々御快方に赴かせ給ひ、近近御床上げ遊ばさるゝやに承りぬ、かしこかれど、うれしきかぎりにこそ。

●靖國神社、臨時大祭と大能樂　靖國神社臨時大祭は、臺灣平定を待ちて、おこなはせらるゝときゝしが、このたび劉永福逃走したれど、同島全部平定の公報あるも近きに在るべく、豫定の十一月の運びには至らざるべきも、十二月二十日前後には、擧行さるべく、且つ皇太子殿下の御不例も、近々御快健に復させ給ふべけれど、御臨幸を仰ぐにも好都合なるべしと云ふ、又この大祭には、維新以來稀なる、大能樂を催はし、賢き邊りの御慰に供奉るよしなるが、府下の名手はさらなり、京都大坂等よりも、其達人出京して、一座するに至るべしとぞ。

●女傑岩村夫人　岩村御料局長の令息、八作氏夫妻は夙に北海道拓殖の事に從ひて、人の龜鑑ともなるべき行狀ありて皇后陛下より御物を賜はりし美談あり。眞に懦夫をも起たしむべし、氏は常に世間の俗士が、徒らに机上の論のみして、實践の勇なきをなげき、我

れから身を沍寒の地に投じて、堅氷深雪と闘はんとする志ありて、明治二十六年五月令閨麟子を伴ひて、北海の征途に上りき、彼地に着きて、先づ地所を選ばんと、諸所の山野を跋渉せしが、固より飽食暖衣に日を送りし身とて、その難儀一方ならず、やう／＼二十七年の春を迎へて、石狩國、樺戸郡、月形村、字晩生内と云ふ所に、六十餘万坪の荒蕪地を得たれど、玆に本據を置くことに決し、形ばかりの荒小屋を營まんとて、岩村氏夫妻は、雪を碎き、丈より高き笹を苅りて、建坪十四坪程の笹小屋を作りしが、素より床板もなく、天井もなく、僅かに雨雪を凌ぐのみなれど、其不自由いはん方なし、此處に引移りたる時、氏が引連れ來りたる小作人、二十七名も又此内に起臥することゝなりたれど、只ださへ狹き笹小屋は、殆んど人を容るゝに餘地なく、氏と麟子と、小屋の片隅に荒筵二枚を敷き延べて、是をぞ夜の床とし、冷かなる夢を結びぬ、斯る間に在りても、少しも厭ふ色は無く、夫妻共に一向農事にのみ心を用ゆるにぞ、心なき役夫等も、其熱心に勵まされて、感激せぬは無かりしとぞ、扨て雪解の頃ともなれど、夫れ／＼小作人に命じて、分配の土地に就かしめ、小屋には只四人の役夫を殘したり、氏は彼等と共に野邊に出でゝ木を伐り地を耕やし、令閨は家に在りて炊事を理むる等、純然たる農夫の生活を營みけれど、亦た外貌を飾る暇もなく、顔も日に焦げ、肌膚も土臭くなりて、花とも見まがひし其人も、見え分かぬほどになりぬ、斯くて夫妻は、益〻其業を勵みしかど、今は其事業も大いに進歩し、不整頓ながらも一個の農場を作るに至れり。其後本年八月、父なる岩村御料局長、岩倉公爵と共に、北海道を巡視せる際、月形村近傍を巡廻する道すがら、久し振りにて、令息八作氏の住居に立ち寄りたるに、折柄氏は野良稼ぎに出でたる留守にて、局長の音なへる時、小屋の内より

一人の女立ち出で、慇懃に會釋するものあり。年頃二十四五にて身には洗ひ晒しの木綿衣の裾短かなるを纏ひ、手足の先きまで燻ぶりたるが、髪は何時取り上げしか、油氣もなくなりて、鬢は蓬ろの如く亂れ、見るさへいぶせきほどなるに、下婢にもやと思ひて、能くよく見れど、傷ましや我子の嫁なるにぞ、流石豪氣の局長も、胸潰れて、暫しは物も得云はず、曾て夢想せる北海道、移住民の現況を、今令息の上に見て、百感交　禁めあへず、其の夜は笹小屋の中に、親子膝を交へて語り明かし、拓殖實踐は宜けれども、此れは亦餘りに極端ならずやといひしとぞ、其より幾日かの後、岩村、岩倉の兩氏は北海道の巡廻を終りて、歸京せしに、岩倉公爵は更に右の次第を皇后宮大夫香川敬三氏に物語り、香川大夫より之を　皇后陛下に奏上し奉りしに、　陛下の御感斜めならず、令閨麟子へ白斜子一匹を下し賜ひ、其勉勵を嘉賞あらせられたれど、香川大夫より父岩村局長へ、

拜啓然者貴官の令息御夫婦北海道へ移住農業に從事勉勵の趣　皇后陛下内々被聞召殊勝に　思召白斜子一匹令息の夫人へ　賜候旨　御沙汰被爲在候間本人へ可然　御申入被下度此段得貴意候也

九月三十日　　皇后宮大夫　香川敬三

御料局長岩村通俊殿

との通知をぞしたりときく。白馬金鞍花柳の間を往來せる富家の子弟は云ふも更なり、月花芝居にのみ心醉はさるゝ女など、きゝたらんには如何なる心地かすらん。

●謠曲「祐亭」　宮内省技師片山東熊氏の夫人てる子は、豫て謠曲に妙へなる人の由なるが、前に聯合艦隊司令長官、伊東祐亭氏が、日清役に偉大の功を奏し、今夏凱旋せしをり、てる子は自ら「祐亭」といへる、謠曲をものして、伊東中將へ贈りしといふ、伊東中將は

之を受けて、感じて、

共々にたてしいさをゝれのれのみ
　　世に譽ある名こそつらけれ

といふ國風を詠じて、返したりと、

祐亨

次第 めでたき御代のためしとてく\。のぼる朝日をあふかむヮキ大臣「頃は明治の廿八年。御代しろしめす大君は。神武の帝このかたの。英明の君にわたらせ給ひ百官「民を憐み國を富し。陸海軍の擴張を、御みづからつとめ給ひ寶算四十にあまり給へどヮキ「御威光いよく\かゞやきて。智仁勇をかね給ひ。文武の俊才みちく\て上歌「久かたの雲井の庭に集まれり。集まれり。めぐみあまれる秋津洲の。國はゆたかにをさまりて陸海軍の勢ひは。破竹の如く進みゆく。折から下る開戰の。大御詔をかしこみて。隣國朝鮮の獨立を助け清國の。頑愚をこらしめて。東洋の文明を進め。永く平和をたもたんとの大御心を心として。諸々の軍人。あつぱれ功名手柄して。御稜威を世界にかゝやかさんと。一命を奉り。敵に向つて勝ざれど。死してやみなん武士の一念こつたる日本軍向ふ敵こそなかりけれく\ 一セイシテ上「草も木も。皆大君になびく世に。いつくか仇の。すみかなるべき。詞「是は聯合艦隊司令長官海軍中將伊東祐亨とは我事也扨ても此度不肖の某大任を蒙りて。去頃黄海威海衛に捷を奏しつるも偏に 天皇陛下の御威徳。且は將校水兵等が盡忠の致す所なり。然るに祐亨か功を御賞美ありて急ぎ一先歸營せよとの宣旨にて候程に。唯今廣島大本營へと急ぎ候我君の大御めぐみの深き夜にく\明るをまたて威海衛。氷れる海にとも綱を、とくく\出る松島艦。聯合艦隊引つれて。たつる煙の追手よく舟はたちまち日の本に。近づくかたや。朝霞たなびかれつゝゆく程に。迎へ

の舟の漕來るや日の大御旗かゞやかし。君が代うたふ奏樂の。聲にひかれて廣島や大本營に着にけり着にけりシテ詞「急ぎ候程に。廣島大本營の御許に着候やがて參上仕候べしいかに案内申候。祐亭只今到着仕て候。然るべきやうに奏聞して給り候へ「侍從詞心得申候。やがて奏聞申さうずるにて候。地「其時伺候の人々には。德大寺内大臣。伊藤山縣西鄉大臣。川上參謀次長を始として。文武の百官並居つゝ。君の出御を待奉れぞ。やがて龍顏うるはしく〳〵。出御まし〳〵かしこくもいと難有き御ことのりに。中將は恐れ入りて感涙の外なかりけりワキ詞「いかに司令長官に申候。只今の有難き勅詔を我等も拜承仕りて候。恐れ多くも。御宸筆をさへ給りたる御身の面目此上やある。我らも悦び申候。只今の勅詔をぞ。今日伺候の人々にも承はらせむやと存候間。是にて讀わげ候はん。扨も此度日清開戰以來。連戰連捷朕が滿足に思ふ所なり。是全く忠勇比類なき汝が功の多きによれり。就中北洋艦隊の最後の始末。朕が尤感賞して止まざる所なり。かの康濟號を彼にとらせて。丁汝昌の柩を送らせつるは。禮なり義ある計ひ指揮のよろしきを得たり。朕深く嘉賞す又別に御ことのりの候は。此度水雷隊の攻擊たる。いまだ世界の海戰史にも多く見ざる所なれぞ。攻擊のさま御前にて物語り候へとの勅詔にて候。やがて御前にて語られ候へシテ「宣旨にもとるは恐れありさらぞ是にて奏聞申候はんクリ上「抑山東省威海衛と申すは山高く水深うして灣内廣しうしろに威海衛の砲臺あり前には劉公島日島等の砲臺ありシテ上「島より陸地に到るまでは防材を敷つらねて淸國北洋艦隊が第一の要害と賴みつる威海衛の砲臺を一擧にして陸軍の手にて落したりシテサシ「あはれ末路の北洋艦隊足弱車の片輪ながら劉公島の道臺と力を合

せ晝夜の警戒怠りなし

せ晝夜の警戒怠りなしシテ下ニ扨此夜はしも攻擊の命令受たる水雷隊命をしまぬやまとをの子第一第二第三の縱隊數を盡して進み行く　（未　完）

●學術演習　彦根高等女學校は、本年七月規則改正以來、女子に必用なる普通學科を始め、技藝修業、家事實習等の練習に深く注意し居りしが、各級生徒の學業、著く進步の徵候を呈せしかば、去月十九日、午後一時より、同校に生徒學術演習會といふを催し、平素學習の藝術を練習せしめ、生徒の言語動作をして、專ら生徒の自治に任せ、生徒の趣向と力量とに應じて、一層優美高尙に赴かしむるを主とし、傍ら同校と家庭との關係を親密にし、彼我互ひに氣脉を通ぜしめんとす、ときく。

●柿本神社　保存會といふもの起れり、その趣旨なりといふをかゝげぬ。いかにもして永遠に保持せさせまほしきことにこそ。

柿本神社保存會旨趣並略則

石見國高角山鎭座贈正一位柿本神社は歌聖　人麿朝臣を祀る所なり按ふに朝臣は　持統文武の兩朝に歷事し數々　聖駕に扈し山川風物を詠吟して一世を聳動し　聖德を翼賛せられし雖萬葉集所載の歌詞に徵して明々昭々たり朝臣は神龜元年三月十八日高角郷鴨山に薨じ給へり斯て後社殿の創建年月は是を詳にせざれども蓋し一千年外に係れりと云ふ明治維新前は舊津和野藩主龜井家に於て代々尊崇せられしに因り社殿の修繕より年中大小の祭祀に至り悉く藩費を以て支度せられき廢藩置縣後列して縣社とせられしも別に社入の補理すべきもの無く日に頽壞を加へ舊觀を永遠に保持することを能はざるに至る是實に慨歎に堪へざる所なり

抑本社は　朝廷に於ても夙に御崇敬あらせられ　中御門天皇の享保八年には特に正一位を贈り玉ひ　御製を御奉納在せられしを始めて　櫻町天皇の延享元年　桃園天皇の寶曆十年　後櫻町天皇明和四年　光格天皇の寬政十年　仁孝天皇の天保十四年前後六次相尋で御製を御奉納あらせられて現に神庫に保存し奉れり如此歷朝　御崇敬あらせらるゝ所の社殿舊跡も逐年衰頽に及ぶは　生等焦心苦慮の至に堪へず依て有志諸大家歌道熱心諸彥の協賛を得以て此衰廢を挽回し社殿の壯觀舊跡の景致をも永遠不朽に保持せんことを企圖すること切なり江湖の諸彥幸に前陳の旨趣を賛助ありて　歌詞金圓の寄附あらんことを切望す

寄贈の歌詞金圓取扱略則

募集金額は凡壹萬圓に充るを度とす　其金員は其都度石見國津和野第五十三國立銀行の保護預けと爲す○金五圓以上　寄附せられし諸君の氏名は石標に鐫刻し之を永遠に傳へ　其以下は木製の額面に列記し之を社殿に揭示す○歌詞誹句の題は高角山の懷古　右一首へ金二十錢以上を添へて奉納せられし諸君をば賛助員と稱し　其歌誹は永く神庫に收藏して世に傳へ金圓は社殿修繕の資に充つ　○金壹圓以上寄附受領證は主唱者及監督二名以上連署したる領收證に　古來傳ふる所の刻本御影を添て送呈し其他は前記の領收證を呈すべし　但し本社今後の大

祭は明治三十一年四月十八日に當れば其以前に社殿の修繕等落成を豫期する所なれば右期限前成べく速に獻饌金品の寄贈あらんことを望む○郵便爲替局は「石見國益田郵便支局宛」受取人は「柿本神社保存會事務所」明治廿八年十月（主唱者）島根縣石見國美濃郡高津村高津七番地柿本神社々司中島匡彌、同（監督）永富弘道、（監督）岡崎彌之助

●わか國の辭書（つゞき）

てにをはゝ、もと上古の人の言詞の懸り結びに、おのづから此法則ありしに起り、假字遣ひとても、上古の人は、いゐえゑおをの音に、必差別有しにより、それに充つべき假字も違ひぬるを、遷都以來、言語も變遷し、後には稍く漢語も多く立交りたるにより、遂ひに平常に云ひかはせる言詞にも、てにをはの古規を失ひ、假字遣ひは古への呼法なる事をも知れる人なくなりにしかど、天暦の頃より以下は、假字文をも詠歌をも、諸人漫りに書しるさん狀となりしかど、當時の歌の宗匠家とて、諸人の信從せる、定家卿の憂ひ歎かれ、河内前司親行と議りて、新に假字遣ひを定めて世に行ひしを定家假字遣と稱し、てにをは及び歌の詠方を教へたる書を併せて、其子孫たる二條冷泉の家に傳へしかど、德川の世に古學家といふ者の起りしまでは、歌よむといふ人は、大かた其法式を守りたり、されど歌學者の書に、てにをは、假字遣ひを論せるは、歌よむためにして、殊に語學者などいふべくもあらず、然るに寶永の頃、難波の僧契沖は、好みて古書を研究し、萬葉集紀記の歌、古今集以下の書を注釋せし餘力を以て、和字正濫抄五卷を著はし、古書に徵して久しく湮滅せる、古への假字遣ひを再興したりけれど、爾來東滿眞淵等の古學家、稍々に贊助して、明治の今は全く其法則に歸したり、されど當時はいまだ假字遣ひのみの事にして、廣く語學（てにをはは此中に籠れり）の考究に及ばず、其方の始は次にいふべし。

明和六年、加茂眞淵翁、其師荷田東滿翁の遺説に基き、語意考一卷を著はし、五十音の次第により、あは初言、いは體言、うは用言、えは令言、をは助言なりとの説を起し、（加行以下もこれに准へて知るべし）ゆかん、ゆき、ゆく、ゆけの類に活ける例を示し、（暫く行といふ詞を以て例せり）延言、約言、略言、轉通の説と、清濁を通はし云ふ例とを擧げたるは、我が國語學の始を起せるものといふべし、創始の事なれど、足らざる事と僻事との交りたるくさもあるべし、按ずるに、寶暦中、谷川士清の著はせる、日本紀通證の首にも、語意考に類せる圖を少しく擧げたるをみれど、神道家に早く端緒を起しゝもの有しならん。

（未完）

教の庭

十一月五日　兼題　殘菊　（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　芝區三田四國町二十二番地　師岡千代子

霜おけとかはらぬ菊のはなみれは
　みさをは松にかきらさりけり

地　筑前穗波郡飯塚町　林　久子

うつろひし物ともなしはつ霜の
　おきかさねたる志らきくの花

人　信濃國上伊那郡赤穗村　小町谷里江子

おくしもも時雨もよろにしら菊の
　花ころ千代のすかたなりけれ

人　高知縣土佐郡小高坂村　楠瀬とめ子

けさ見れは霜の花さへ咲きそひて
　ふゆかれしらぬませのしら菊

おく霜のにほはさりせはのこるとも
　いかてかられと志らきくのはな　風間千代子

中〳〵に折られさりけりわかせこの
　かきねにのこる志らきくのはな　中山てい子

おく霜の志ろきを見れは志らきくの
　はなものこりてにほひぬるかな　戸澤千壽子

くれゆきし秋のかた見のしらきくの
　志ろきかうへにしもおきにけり　田邊寶子

植ゑしとき花まちとほにおもひしを
　あきにおくれてにほふ志らきく　小尾くら子

秋暮れしまかきにのこる志らきくは
　あらたににほふこゝちこそすれ　小尾玉代子

八千草のかれし野邊にも志らきくは
　おくしもさむくなほにほふなり　住山幾子

もゝくさのかれてあとなき野の末に
　おくしもさむくにほふ志らきく　安井章子

置く霜にうつろふへくも見えぬかな
　かれゆく野邊に咲ける志らきく　住山せの子

虫の音もひと目もくさもかれはてゝ
　のこるもさひし野邊のしらきく　丸山須磨子

志くれの雨いたくなふりそわか宿の
　きくのいろ香のうすれもやせむ　鈴木美惠子

けさのあさけ雪と見るまておく霜に
　ふたゝひにほふしらきくのはな　牧野幸子

やまさとの人目はいつかかれにしを
　あきなからなるしらきくのはな　牧野楢子

あさな〳〵むはおけとしもはおけと　牧野榊子

うつろふいろの見ゑぬしらきく

にはの面に今朝はつ霜のおきてより
いろまさりけりしらきくのはな　牧野澤子

うろはしな小春の日かけのさかにて
のころきくをもてあそひけり　西村登巨子

うろはしなこ春の日かけのさかにて
のころきくにもてふさへそくろ　濱口直子

冬くれさしくれにしもにうつろはて
のころもひさしにはのしらきく　濱口寛子

あさしもを打はらひつゝ立ちよりて
折ろてにかをろにはのしらきく　神田靜子

おくしもに枝たわみてもきくのはな
いろかうせしさきのこりけり　神田樂子

霜かれてくさはのいろはかはれとも
ひさりおいせぬにはのしらきく　町田貞子

冬のきてしもおくにはのしらきくに
ちよのいろかの見ゑにけろかな　町田鶴子

この頃はひさめもかろゝのへなれと
なほさきのころきくもありけり　大島愛子

かきりある秋の日かすはすきにしに
たにまにのころきくのはなかな　濱口秀子

木曾ちなろ谷間にのころしらきくは
千とせのあきのれさしなりけり　濱口純子

ゆく秋のかたみとやみんわかにはに
あはれのこれろしらきくのはな　神田春子

草も木もしもかれはてしふゆののに
きくのはなのみさきのこりたり　濱口佳子

千くさみなかれふす庭にうちましり
のころもひさししらきくのはな　西村菊子

志はかきにのこれろ菊もありなから
まつふくかせはふゆめきにけり　中島房子

あきをへてのころまかきのきくの花
さひしきまてにあはれなろかな　松原常子

もみちせし垣ねのつたもちりすきて
ひとりのこれろしらきくのはな　浦島龜子

こからしの風にもちらてわかやさの
かきねにのころしらきくのはな　水島巨子

志もふかきあしたの庭にのこりけり
千世のれさしのしらきくのはな　楠　稍子

わかやさのまかきの下にかれのころ
きくは千とせのれさしなりけり　野田千代子

千世ふへききくもいつしか老にけん
いたゝくしもにおきなさひたり　島田好子

いにし秋の形みとそみろわかやさの
まかきにのころしらきくのはな　木村兼子

かきりある秋の日かすはすきにしを
なほさきのころしらきくのはな　吉川國子

冬かれのしもをかしらにいたゝきて
のころもさひしのへのしらきく　成田常子

こと草のかれたろのへにおく志もを　曾山道子

かされてにほふしらきくのはな

冬たけてあらすふろやのにはの面に
かれなでのころしらきくのはな　松井佳子

山すみのしはのかきねにおくしもを
しものきてのこるしらきくのはな　根岸英子

秋はまたしものかきねにのこりつゝ
あさ日ににほふにはのしらきく　神田鈴子

人目さへかれゆくやとのきくのはな
たれをまつらんしものかきねに　春木繁子

月さえておくしもしろきわかにはに
身にしむはかりにほふきくかな　荒木すま子

八千くさはしもかれはてゝ庭の面に
かはらぬいろを見するしらきく　近藤秀子

なかなかにしもおく庭のしはかきに
ひとりのこれるしらきくのはな　荒川清子

うつたかく落はつもれるませかきに
きのふのまゝにのこるしらきく　荒井波子

うつろはて今ものこれるきくのはな
まかきもあきやなほたのみなる　澤田俊子

わかやとのかきねに秋やのこるらん
うつろひなからさけるしらきく　神田榮子

こからしのふきすさひたる後なれと
のこれるものはしらきくのはな　吉川禮子

朝なく霜はおけともませのうちに
ひとりのこれるしらきくのはな　遠藤錦子

おくしもに菊のはなのみのこりけり
千くさかれにしにはのまかきに　花山保江子

枯れ果てし庭の千くさのそのなかに
ひとりのこりて咲けるしらきく　花山操子

霜おきてにはの千くさはかれにしを
さきを得かほににほふきくかな　花山乙子

しもかれの冬までのこるしらきくは
むらさきふかくにほひけるかな　碓井信子

大御代のひさしかれとやきくのはな
しもをしのきて咲きのこるらん　仝　武子

しもをへて咲きのこりけりしら菊の
あかぬにほひのなほまさりつゝ　仝　和可子

あかすみん秋なきさきもあきの色を
なほおくしもににほふしらきく　高井孟子

かれわたる野のきせわたとりみれは
むかしのあきの香こそふかけれ　佐々行郷子

いつまでのかきりも見えぬ匂ひかな
しものまかきのしらきくのはな　永井さい子

しきしまの大和こゝろかおくしもに
たゆまてにほふしらきくのはな　静間みつ子

庭はあれて落葉おりしくわかやとに
のこるきくこそゆかしかりけれ　小野きん子

しもかれの庭ににほへるきくのはな
しろきはいとゝさむけかりけり　野崎章子

惜みてしあきのなこりの香をとめて　和久井良子

まがきにゝほふしらきくのはな

八千草はみなかたはてしやれかきに
のころもあはれきくのひともと
山越つれ子

來てみれは花のさかりも志のはるゝ
さひしくのころにはのしらきく
白石藤子

おく霜にいろは見ねれさしらきくの
たかきみさをは香にそしらるゝ
山田壽美子

霜をへてふきもかれせぬしらきくの
たかきみさをのしたはるゝかな
遠藤皆子

蟲の音もかれゆくそののませかきに
にほひふかくものころ志らきく
近山まつ子

こかれきく時雨のあめにうちのへて
はなのいろ香をうすくこそすれ
土屋ひさ子

日にそひて冬かれわたるにはの面に
なこりゆかしくにほふきくかな
磯部つや子

もゝ草のかれつくしたるにはの面に
千代經んいろやしらきくのはな
尾崎尭子

中なかにうつろふきくそあはれなる
あきのかたみさひさのめてつゝ
佐藤あさま子

朝こさにしものしろたへかされても
さむけにのころ志らきくのはな
羽田三緒子

かれてゆく千草のはなをよそにみて
うつろふこさも志らきくのはな
河田いし子

冬の野にきくはかりこそのこりけれ
しもにかれ行くさにならはて
羽田種子（九年六ヶ月）

夕まくれかきねましろにきねのころ
しもかさ見ねてのころしらきく
川口政子

あさな〳〵いやますもののしろ妙に
いろをくらへてさけるきくかな
上田ふく子

もゝ草のかれにしあさにさきのころ
きくこそにはのをしへなりけれ
長谷川志やう子

おく霜にいろむらさきさかはろさも
かれなてにほへにはのしらきく
河原春子

來ん年もまた咲きにほへしらきくの
ふゆまてあきのなこりさゝめて
河原季子

志もむすふかきのしら菊世のあきを
しらてやひとりさきのころらん
太田貞子

おきそはる霜にもいろはまさるなり
かれのこりたるしらきくのはな
梶非久子

しは垣にかゝるさ見しはしもならて
あはれゆかしきしらきくのはな
遠山櫻子

散しけるおちはかなかにいろもかも
あきのまゝなるしらきくのはな
樋口のふ子

時雨にもしもにもかれすにほふかな
かきれのもさにのころしらきく
佐治ふさ子

もゝち草かれてさひしきにはの面に
ゆかしくのころきくのひともさ
海島信子

みさをは變へしさ殘るひさもさの
きくこそおのかゝみなりけれ
海島定子

さきすきて色みねぬまにおゝしもを
服部かつみ子

しらすがほにもにほふしらきく

霜ながらまたうつろはて庭のおもに
あきのかたみと咲けるしらきく　越井道子

咲のころにはのまがきのきくのはな
ちよのいろ香そなほ見えにける　小野田信子

もゝ草のいろはうつろふしもがれに
きくのみひとり香ににほふなり　青木春子

秋はてし野邊にのこれるしらぎくは
千くさのはなのかたみなるらん　内田はる子

家つとに手折るもをしやいかにせん
野なかにのこるきくのひともと　内田たけ子

あはれなり秋のなごりとしらきくの
いろ香はなほもふかくさのさと　小幡ふみ代子

けさ見ればかれ野の霜のはつはなの
いろにきそひてのこるしらきく　山田ゑい子

八千くさのさかり過にしかなりなは
きくにのこしてあきはくれけり　小幡千代子

冬がれの野すゑにのこるひともとは
千代のかたみのしらきくのはな　松原保子

霜がれの世のうきこともしらきくの
しらすがほにも咲きにけるかな　大津千枝子

あれはてし庭のまがきにひともとの
あるじがほなるしらきくのはな　松本みち子

こと草はみなかれはつるにはの面に
ひともとゆかししものしらきく　松本よれ子

朝な〳〵しもにけたれぬいろ見えて
あきのかた見にのこるしらきく　岡崎たか子

鳴く蟲のこゑもかれ野ににほふかな
しもかとまがふきくのひともと　岡崎房尾子

咲きてより久しくなれどしもさへも
おきわすれたりしらきくのはな　松田靜枝子

冬の日もまがきにあきやとまりけむ
いろ香かはらぬしらきくのはな　久松勢伊子

うつろふも又ひとしほのにほひかな
はなきふゆのにはのしらきく　野中あき子

もみち葉のちりしくころはしら菊も
むらさきふかくなりにけるかな　久松とく子

霜をへてかれふにさけるしらきくは
まことに千代のいろ香なりけり　河野文子

いく人に八千代のつゆのむすはれて
おのれやつるゝあきゝくのはな　澤田たま子

霜志ろくおきわたしたるにはの面に
にほふもさむしきくのひともと　眞鍋直子

のどかなる小春のそらにいろそひて
ゆかしくにほふしらきくのはな　大堀楢子

おく霜にまがはざりけりむらさきの
いろにうつろふきくのひともと　大町蝶子

おく霜にうつもれながら咲きのこる
まがきのきくの香こそたかけれ　大町よし子

おく霜にまたひとさかりにほふかな　伊藤敏子

ふゆかれしらぬしらきくのはな

もゝ草も千くさもかれてむさし野の
ひともときくの香こそたかけれ　勝　かなる子

八千草はかれてあとなきふゆの野に
ひとりのこるかしらきくのはな　田中くに子

しらさゝの籬のしつくにほたされて
おくれてにほふはなそゆかしき　北村孝子

まちわびし菊のさかりはすきはてゝ
いまはかきねにのこるひともと　北村てい子

あはれけにあれたる園にさきいてゝ
しもにゝほへるきくのひともと　今井幾久子

しもかれの冬ものこれるしらきくに
あきのかこともかけてみるかな　南　淑子

八千くさはあとなくなりし冬かれの
にはのあるしやしらきくのはな　三笠友子

霜しろきあしたのにはにいろも香も
見まさりするはしらきくのはな　冨士野安香子

冬きてもやつれさりけりあさよひに
こゝろつくしゝきくのはなかき　川田こう子

あさ霜のおち葉におけるこゝろして
かきねにゝほふしらきくのはな　植木鋼子

ちりつもる末のこの世をよそにして
しもにもきくのさきにほふかな　吉田愛子

冬のきてしもおきそふるしらきくは
うつろひてこそ香はまさりけれ　木村千代子

霜なから千代のみさをはにほひけり
たけのまかきのしらきくのはな　畠山千代子

くれはてし秋のにほひをひともとの
はなにのこせるませのしらきく　畠山ゆき子

おく霜にいろ香そはりてさきのこる
まかきのもとのしらきくのはな　岩崎今子

秋のいろはしもにあとなく消ぬれと
のこれるきくはふゆとしもなし　鎌形恒子

千代しめし色をも見せてふゆかれの
しものまかきにゝほふしらきく　鎌形素子

むら時雨さひしくそゝくにはの面に
あはれうつろふしらきくのはな　松尾萩子

ことよせてすきにし秋をしのへとか
のこるもうれしやとのしらきく　日下さく子

霜かれし千くさのなかにひとりのみ
にほふやきくのみさをなるらん　丸川せき子

くれなゐの色になりてもにほふかな
しものまかきのしらきくのはな　中村芳尾子

虫の音もかれてあとなきくさむらに
うつろひのこるきくのひともと　林　みつ子

霜かれのすゑまてのこるしらきくは
はなのあるしと千代きそふらん　名取正代子

朝ことにうつろひはてゝしらきくの
のこりすくなくなりにけるかな　黒澤榮子

八千草はうらかれぬとも千ゝの秋の　薬師寺野子

かたみとさけるしらきくのはな

しゝ草はかれてさびしきふゆの野に
ひとりに匂へるしらきくのはな
藥師寺芳子

冬かれの野邊までにほふしらきくは
こゝろありてやさきのこるらん
工藤昌逸子

秋ふけて野邊にみたるゝしらきくは
見ることなきぞかなしかりける
春野家榮子

はかなしや訪ふ人もなきわかやどの
かきねににほふしらきくのはな
堀谷きく江子

眞さかりは訪ふ人こゝに手折りしを
のこるしらきく見るひともなし
堀谷よし子

にほへとも訪ふ人もなしわかやどの
かきねにのこるしらきくのはな
堀谷やな子

時にあひて咲けるしらきく冬かけて
のこるにほひもひさしかりける
土肥仙子

おくしもの後までにほふしらきくの
みさをにならふこゝろともかな
三浦時子

わか宿のにはのかきねにたゞひとり
さひしくのこるしらきくのはな
後藤みつ子

我やどのまがきにふゆのへだてなく
あきのまゝなるしらきくのはな
福地ふく子

千世ふへき君かかさしとふゆかけて
ひとりのこれるしらきくのはな
井出信子

なか月もいつしか過ぎてしらきくの
かたみにのこるはなのおもかげ
伊藤はる子

霜かれのまがきのもとにしらきくの
のこるもさびしよもぎふのやど
田中さち子

霜かれてさびしきにはにむらきくの
ゆきかとみゐてのころしきゝ
今井さか子

移ろひしきくのまかきを今とみれは
しものはなこそさきかされけれ
鳥飼千重子

ゆかしくも見ゐにげるかな庭の面に
ひともとのこるしらきくのはな
杉浦いさ子

置く霜にやつれもやらずにほふかな
千とせのいろのしらきくのはな
池谷富子

こと草にならはて野邊ににほふかな
しもにいろそふしらきくのはな
館脇ますと子

なか月のなかきためしにきくのはな
あきよりふゆに咲きつゝくらん
晋婁ちか子

おのつから殘るもうれしなかつきの
しものまかきににほふしらきく
諸井久良子

おく霜にいろ香もうせすしらきくの
ふゆまでのこるさまぞゆかしき
大谷津摩子

朝なく置きそふ霜にうつろはて
のこれるきくのいろ香ゆかしも
保坂いま子

冬たてといろもかはらすわかやどの
かきねににほふしらきくのはな
福澤喜代子

おく霜をしのふのみかはいろ香さへ
いとゝまされるきくのはなかな
福澤はる子

八千草のかれにし野邊にさきのこる
降田棋子

菊のみさをのたかくもあるかな

おくしもにしほまぬ菊のはなにこそ
千世もつきせぬ香はこもりけれ
古市義舞子

大かたはしもにかれゆくわかにはに
咲きにほひけりしらきくのはな
加藤琴子

月かけも身にしむふゆのゆふまくれ
そのふにゝほふしらきくのはな
松井千代子

この朝けおくはつしもにしらきくの
はなのひさへもひさへさは見す
河村土子

しもかれし冬野にのころしらきくは
千代もへぬへきはなさこそ見れ
廣田さめ子

霜かれのそのふにさけるしらきくは
まつさみさをの色をこそきそへ
香川頴子

しらきくはひさもさかきに咲にけり
あきの名こりを香にしらせつゝ
大久保みち子

十一月五日　兼題　羇中時雨　（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　大阪市北區相生町百六拾二番邸　梶井久子

「父母の旅なる我を思ふらんまつらんさまの俤にみゆ」とうたひしも斯る折なりけんと覺ゆるまで故郷の空のみいとなつかしう一日も早くと心急かるれは錦織りなす山の紅葉浦こぎいつる蜑の釣舟なとめつらかなるなかめにも目とまらてひたすらあしをなんはやめたる頃は神無月のなかはなり今まてうらゝかなりし空俄に打くもりて山風わらわらしう木の葉をさそひ雲のあしさへ走るやうなれは今や去くるゝと心いとあわたゝしさりともやとりまては降らてあれよなと念しつゝ空目かちにてたとりくれはいつくなるらんはやつきいたすは入相の鐘なりけりいとと心細さも打ろはりてわひしう悲しきにさと吹きおろす嵐と共にはやはらはらとこほれきぬされと待たるゝあたりの戀しさに濡るゝはものかはとなほゆけはいよいよおとろおとろしう降り増りてあたりかきくらすやうなるに去はしとて山かけ庵の軒をかり袂の露裳すその雫なと絞りつゝ見れは今の雲はいつちいにけんあともなく雨もやみ風さへをさまりて夕日の影は西の山に入りなんとしてなほかゝやきぬいと嬉しうてはや立出てんとすれは今まては音もせさりし庵の内より「いろかすはぬれさらましを」となかめいてたるいとにくしや

地　下野國足利町　川田こう子

ふるさとをあとになして海山遠くへたてこし身はをりをりにつけてあはれならぬはなしことに物すさましき

冬の夜のふけわたりたるころこはれる影かとまかふ斗り月の空たかくすみわたれるにさと吹くる風に木の葉のみたるゝをきゝてはいとゞあはれの身にしむをりから一聲を月に名のりて松原遠く過ぎわたる鴈のしたはしさにしはしとゞめてことつてせんと思へどもいかにせんつたなき身は思ひのたけの千々の一たにもらすへきことの葉すらおもふにまかせすくちをしき事限なけれとこも日頃をこたりかちにてなす事もなくいたつらにすこしゝむくひと思へはいと面はゆしいてや今よりつとめはけみて一日も早う錦をふるさとにかざらん旅ゐのやとのふつくゑにむかふ折しもはら／＼と音たつるに窓のとをひらき眺むれは月はいつしか雲間に影きえて時雨さへふり出て一しほ物かなしうまたもふるさとの忍はれて覺ゑす袖のぬれまさりてなむ

ふるさとを忍ふたもとの露けきに
またふりそゝくむら時雨かな

人
播磨龍野　眞鍋　直子

うき事しけき旅なからも今日迄は峯の紅葉野への千草といろ／＼心のうつり行きてなくさむふしはありにしを木々の梢はちり八千草は枯れはてゝ物さひしき冬のけはひとなりしよりいとも古卿のみ思出らるゝに此頃のならひとてまなく時雨の降りいてゝさらぬたに露けき袖をぬらしそふるなんいとわひしくて

露さへもかわくひまなきわか袖を
またもぬらしてふる時雨かな

けふもまた時雨の雨の降りいてぬ
さらてもつらくおもふ旅路に

人
長野縣長野町　太田　貞子

今宵奈良の片山里にやどる時は神無月の初めつかたなれどまだ宵なから出つる片われの月假りの宿りにひとりすみ時しりかほにおとつるゝ松のあらしも身にしみ／＼なり憂きふししらぬ身にもなれぬ旅ねのいと心細くてこしかたゆく末のことゝもおもひ出てらるゝに時ならぬ袖もぬらされてなん今日の日記なとものしてやがていねんとするにさら／＼と庭の落葉におとつるゝは何にかあらんいたう身にしむよなとひとりこちつゝやをら妻戸おしあくるにありし月の影も見ゑてしくるゝ空のけしきいとしめやかなりあはれ古郷にありしはとは只ふし心地もことになとなくさみにしをかうあはれなるものとも知らざりけりあはれ露たにうしといひけん旅の心も今さら思ひ合せられて悲しきを潮風すさましき臺灣わたり戈を枕の假ねの夢やいかならんなど

れもひ廻らすほとに夜もやう／＼ふけわたりてさろふあらしの聲も去つまりて軒の玉水つゆまきれぬに所からとて鹿の遠音のほろう絶／＼に聞ゆたるすみかにあはれまさりてなん

鳴鹿のこゑもしくれて草まくら
旅ねのとこもつゆけかりけり

佐々有鄰子

むしのたれきぬならねと去なさかるひなの旅路は傘は蝙蝠にし雨衣をラシャにてつくれるか大木曾や小木曾の山路ははたみはなさぬ一種の要品になもありけろ千早振神無月は小春なせるみ空の日影いつしかかきくれて紅葉ふきまき一むらふりくろものから袖笠ならぬ蝙蝠を手にさりひらくまにむかひのみれにはれゆきぬとみれはおくれし友の去とさにぬれしラシャ衣のしつくをそへてまたもふりくろ時雨に姿か袂もぬれそほちてあなくるしや

佐藤あさま子

時雨降ろ頃としなれは萬あはれに悲しきものなろかまして故郷遠くたらちれのなつかしきも友達の歎はしきも夢ならてはぬ遇ふましき旅の空如何にかなしき事ならむ
山路に日落ちて行く先尙遙なり急かむとすれは掻き曇り時雨のめくり來て心の闇の先そ暮れ迷ふなろ更け行く夜は寢られぬまゝに故郷の事なと思ひ出て憂に沈む折柄時雨を誘ふ秋風のさと駿ひ來て孤燈消ゆなんとすれはもろものならなくにけしう枕のひち勝なろそ悲しき極なろ曉出てんとすれは時雨ろゝ空の色定めなき心元なし其他道々のあはれは谷に降りて一葉二葉時雨に散り行く紅葉を悼みては家に居ます老親を思ひ出て丘に登りて時雨に曇ろ彼方の空を眺めてはふり捨てし友達をなつかしむなんと何れ悲しきものゝためしならすやけにさろ様に悲しう心細く覺ゆろものから物の哀れは斯かろ時にこそと思ふ心に聊慰めらろゝ方もあろかし

名取正代子

さらぬたに人目も草もかれわたりいとゝ去めりかちなろこのころまして旅に有てのはれぬなかめはかりさひしくうきものはあらしかしきのふはにしきと去きたらん如くなりし八千草もよへよりの時雨に色あせはてゝいたく打しをれたろに木枯さへふきそひて紅葉ましりに零ちりかふ夕くれのさひしさ貧にたとへもなくなんかゝろ折こそうき旅のうさはいよ／＼まさろなれあはれ故郷の父母いかにおはすらんはらからはいかに此寒風にさかされたまひそ此夕暮のそらいかに淋しと思すらんなとくさ／＼おもひいてられてはなか／＼にねたふへうもあらす雨の爲ならねとも幾たひか袖の雫を去ほりあけつゝ文にてもつてまほしうおもふ折しもかりかれの二聲三聲いと物あはれにきこゆろは故郷よりのたよりにてももてきたれろか

今井幾久子

草のまくらの夜も安うはいも寐られすあすは其の宿迄越さはや此先なろ峠をうち過き湖をたに渡らは汽車線に出へしとこそ聞きつれ夜あけなは又も枯れ芝に置く霜を蹈分て或は舟にゆられ車にもまれて行かんことの憂やされともかはろ山々の色珍しき水の音は昨日にも増してなかしからむ只恐しきはむくつけき者の道連顔する事になんなと思ひ續くろ程にはや明渡りけん妻戸をやろ音に起き出てゝなかむれはこは如何に空かき曇りて珍しと見けろ山の紅葉も雲にかくれつれは胸先つ潰れて出立んよそほひすへき力もなし朝けしたゝめ終ろ頃は風さへ加は

りてけさ時雨かゝりぬ朝の程のみと思ひつゝるを追々おさろ／＼しくなりてみ過る頃にいたく怒うちあるゝにさて障子ともしめ渡しければいよ／＼いふせし小やみ待つ程はなか／＼やる瀬ありしも今は峠越ねん事のむつかしきに今日は此宿にと思ひ定めてはいとゝ徒然やる方なし語らふ友のなきはいふも更なり文よまんにも心ゆかす日記ものせんとて女の童を召して所の事とも問へは詞に聞き取りかたき節々あり借ても故郷は遠くなりぬるがなけふの時雨は彼地にもか妾を送りし人の袖には如何あなつかし再ひ歸るは何日なるか行く先も覺束な如何なる憂目か見んなとつらつゐつくつくわひぬれは如何なる隙より玉水の入り來けん袖の上に一滴

さらてたに旅のころものつゆけきを
いかにせよとかしくれふりそふ

大堀楢子

いつの年も秋のみのりのよきを見て旅するこそこよなうこゝちよきものなりけれころしも神無月昔學ひの友たりし山田の姉君名所古跡を尋ねんとたつれこしければいと打よろこひて互にすきし昔をかたらひて一夜をあかしあさまたきにうち連れて安藝の吉田へとて門出せり道すからの里々は千町の小田に稲城を築き見渡す山々は紅葉のにしきを着そめ一しほの興を添ふれと道もなか／＼はかとりて最早郡山なる毛利公の舊き城山も見ゆるにその頃より時雨ては晴れ晴れてはしくれければ女の身のはかなくて足もつかれはか／＼しからす時に妾

たとりゆく里にかゝるとおもふまに
はかなくふれるむらしくれかな

とさゝやきければ山田の姉君も

一しきりしくれてはれてまたふりて
たひのうきめもまさられにけり

と詠し互に語らひて少しはつかれを忘るゝまゝに吉田の里に着き翌る朝晴わたれる内は毛利公の古城趾墳墓をとむらひやゝありて時雨にければ足やすめにとて又も一夜もあかし明る朝くまなく晴れしを幸に故郷へといそきしに只一度の時雨にあひしかやかて妾か宿につきにけりかくて燈の下にてかくはものしぬ

鳥飼千重子

旅としいへは一夜の宿たにものうき心地すなるにおのれといつころなれし都をたちいてしょりはる／＼といく海山をあくかれて夜こゝにかはる草のまくらに故郷の夢をむすひしはそもいくかにやあらんとなきたに曉の鳫夜の鹿いつれ哀の種ならぬはなきをまして野山のあらし木枯の草木をやふるこゑさては霜にさゆ行月影を見るにつけてもあはれいつのまに冬のおとつれにけむされはおのれはきなれし旅の衣のぬきかふる代とてもなるれは秋のまゝなるをつれなくもきた山風のふくたひにいとゝ身にしむにつけても古里の事のしのはれておほえす袖そしめりける志はしたに身の夢をわすれむものとやなら窓うち明けてあすの行道あるはこしかたなとそこはかとなくおもひつゝくる折しも今まて晴にし夕日の影のくもれるかとみれはやかて高れのかたはゝれたりはるかになかめやれは遠山もとの一むら松の杜さへ消ね行こさくいとうすうなりゆくまゝきのふの時雨に笠やとりせし森にやあらんと見るほとに庭の紅葉のはら／＼とちるかとみれはやかて時雨さへいたくふりきぬふと心つけは怒うつ雨に袖さへぬれとほりぬたゝ袖のみかは心の底さへすゝろにしめりてわひしさいはんかたなし

かけとめてかさやとりせしかた岡の
もりはあらしにまたしくれけり

碓井信子

春雨五月雨時雨なと、名こそたかひたれ唯た節によりて變りぬされは人の心にうかふ事もまた變りぬさりなからいつれも雨といへは心の晴るゝ事なくうつくしきものになんさて此頃は秋の日もいよ〳〵けふあすとのみなりゆく折なれはふりみふらすみ定めなく時雨のいと一ふりまさるはいと心ほそくなんましてたひのうちの時雨ほとかきりなくいふせくはたわひしきものはあらしかし

さらぬたに秋はかなしききくたひに
あはれわひしきむらしくれかな

香川頴子

神無月の初わか古さと人をとはんとて旅衣身にまとひつゝ出立ちぬ行き〳〵てとある山路にかゝりしに俄に空のかきくもりて日もくれはてたるはかりにいみしく暗しさてもひんなき事かなとかつまもなくはらはらとうちしくれきぬれはいかゝはせむと思ふにも近きに宿もなしかさしかくれは風荒々しくて身も共に吹き飛はされんとすせんかたつきてしはしは足を空に急きしかやう〳〵大きなる木の立てるを見つけてしはしのやとりと頼む陰にも雨もりていとゝぬれにし袂をしほりもあへす小雨になりぬる程又立ちいてなれぬ山路をたとりしは旅するみのならひとはいへとても心つくしのわさなりや

保坂いま子

このころのそらほとさためなく頼みかたきはあらさるへしけふは日和もよけれはとて朝とく旅のやとりを立いつれは冬のあしたのけしきもまたおもしろくてゆく道々川筋よりはしろき湯氣のやうなるもの立のほりてそか中には水鳥なとさむさもしらぬかほにておよくめりこゝかしこのそらにたなびけるは里の朝けたく煙りにやあらんはるかなゝふしのねかくれたる處なくよく見ゆましろくつもれる雪はいつのまにかふりけんなとおもひつゝけつゝ行けは日はやひるちかくて何といふ島にかあらん雪の中にてさへつる小六月といふなる日影を背におひつゝ來つれはぬくしともぬくし上衣一つぬかはやなとおもふ中に里をは通りすきていとひろき原になりぬ今まで目の前なりしむら山はにはかに雲にかきくれて影たに見えすかなた此方のそらには雲立さわきてすさましされといまたふしのねははれて見ゆうれしとおもひて行くほとにおのかゆくてのそらの上に一村の雲は立おほひ來ぬかくては叶はしい足をはやめんとするほとこそあれ時雨のあめはささふり來ぬ里にてもさあるへきにこゝにてはいかにせんやうもなし旅なれはなほものかなしいそきゆくまゝにとある森にいりぬ木影にてもしはししのかんものをとあたりを見れはさゝやかなる社あり人は見えねとしはしやすらはせ玉へなと神の御前にぬかつきひとりこちつゝ腰うちかけていこふまにはやこゝにも時雨の追ひ來て松の嵐は時雨のしるしとかはり槇の葉なと打つ音いと淋しやすらへる中に墨斗とり出て短册に書つけとゝけゝる歌

追ひ來つる時雨のあめも大神のみかけよりこそしのかれにけれ」

かくる中に時雨ははれていぬいそく路にもあられとはるゝまゝにこゝを立いて見れは雲間よりもるゝ夕日の影いとあかくふしのねはた四方の山ゝあらひたらんやう也かゝるけしきはつたなき筆も及はれはねかゝすゝへて旅にはかうやうのつらき事をかしき事いとおほかりかくてやとりにつきて燈のもとにてかくはしるしつ

上州伊香保松濤樓のたかとのに上野の山の月を見て

河野文子

名もたかき上の丶やまのくもはれて
なすまくまさのつきのさやけさ
岡崎隆子

妓王
世を忍ふ嵯峨野のおくのをみなへし
知るひとそ知るはなのこゝろを
諏訪晴子

古渡霧
霧ふかくたちかされたるあさほらけ
なにはのわたり見ねわかぬかな
仝

擣衣寒
うつ方はいつこなるらんあきさむみ
しつかきぬたのたかくきこゆる
小幡千代子

月映露
秋の野におきあまりたるつゆことに
つきのやどらぬくさの葉もなし
太田貞子

秋山家
もみちかりきのこかりにと人もきて
つれ〴〵しらぬあきのやまさと
仝

柳の圖に題す
やさしさはさもあらはあれ何らにも
なひくこゝろはならはすもかな
小川金子

待友
いてさらは迎へくるまやりてまし
あまりに友のおそくもあるかな
小川富子

きぬた
ゝひく〴〵に時もたかへすきこゆるは
とほのあなたの衣ぬたなるらん
仝

仝
もみちちる外山のあらしみに志みて
うたぬよもなし志つかさころも
溝口直子

藤袴
さま〴〵のちくさの中にたれかきて
ひもときすてしふちはかまそも
仝

女鑑といふ雑誌をみて
今のよになつかしきかなこのふみは
いろもかもあるはやしなりけり
成田延子

落葉
なくむしも庭のくさはもうらかれて
けささひしくも木のはちるなり
中島房子

老人
いくたひかむかしかたりをくり返し
かたらふおいにわれもなりなん
澤田俊子

名所紅葉
立田ひめ手わさをたきのかはなみに
うつ志てみするみれのもみちは
木村鍬子

海邊月
夜あみうつ小舟もみねてたまくしけ
ふたみかうらにすめるつきかな
神田錦子

雨中紅葉
ぬれぬさももみちかりせんたきの川
けさのしくれにいろやまさらん

秋鳥　根岸英子

いなむらにひかぬなる子の音するは
　むれきてさわくすゝめなるらん

雨中雁來　丸山糸子

玉つさをたかためかけていそくらん
　あめもいとはてかりのきにける

初冬山家　越山雪子

もみちはのちりてうかへる山の井に
　かけさへみねてふゆはきにけり

寄竹祝　松原ゆき子

さし毎にみとりいろ添ふくれたけを
　きみかちとせのともとこそ見れ

赤十字社看護婦をよめる　保坂いま子

つるきたちとりはかぬ身も皇くにに
　つくさんみちはある世なりけり

初冬　鳥飼千重子

時雨するくも井のそらをけさみれは
　なへてさひしきふゆはきにけり

深夜雁　仝

秋の夜のさやけきそらにつきさねて
　なきわたる雁のかすもみねけり

喞筒　女子高等師範學校三年生　新橋きく子

世に都の花とかや云ひさわけと火の來はかり　おそるへきものはあらし　みるかうちに大厦高樓を灰となしあまたの寶を烟となし多くの人をくるしめつゝいへおしけき猶をも　たちまちにひろき野らとなすそのするましきこといみしき惡魔の舌をあらはしてあれまはるかことしその力の強きことたやすく當るへくもあらずそか心のまゝにまかせたらんにはくにのうちことことくやけもてゆきて　かきるところもあらしかしおそろしきかなすさましきかな

風伯はなにの心にか却てこの惡魔を助けて勢たけからしむ　人みなもて之にあたれは忽ちにやき殺さる水は惡魔の恐るゝものなれと　すくなからんには中々にあなつられぬへしあはれ　世にいと力つよきこの惡魔をとりひしきほろほすものはたゝ喞　筒にこそありけれそは惡魔の恐るゝ水を太たゝかに打かくるをもてなり實にこを用ゐは井　河とてはちかゝらぬ海の水をさへ思ふまゝに引きて打そゝくことを得へしされはこのもの世にいてゝよりはかの惡魔　の力もいみしくおとろへきておそろしくもあらすなりぬいとめてたきことにこそ

抑もポンプといへるは空氣の壓力を應　用して水を高くあくへき樣したるものにしてまつ構造のおほよそをいへは金又は木にて造りたる　ひろきつゝのよき程のところに流出口とて水のなかれいつへきくちをそなへたる喞筒管と名くるものに吸　管といふせはき管をすき間あらせすきひしく緊きて井にまれ河にまれ　水にとゝくへくものしたり而して喞筒管の中に吸子とて上下するを得へくつくれる機　械ありこの吸子には中央に孔ありて其孔の上にたゝ上にのみひらくへき辨をそなへたり　また吸管と喞筒管との界にもおなしく上にのみひらくへき辨あり　さて此吸子を引きあくれはこれと辨との間に空處生して外氣の壓　力まさるをもて水は吸管の上の界にある辨をあけて筒の中に入るへしこの時吸子を下せはつゝの中の水は吸子の辨をあけて　その上にいつかくする事あまたゝひなれは水はつゝの中に滿て流出口よりたはしり出つへし　またこの流出口にかへて昇管といふものを設りて水をしたゝかに集むるもあ

り亦を遠く送らんとては昇審になかきくたをつくるなりまた吸子を上下するにもくさ〳〵の法をもてするなりさらいかに巧なるうつはならすや

數學の説

女子高等師範學校三年生　天野きよ子

風のおと蟲のねなといひけむ秋の夜こそ殊にあはれまさるものなれ月は澄みわたりて鏡を掛たるか如く露はおきわたして白玉しきたらんか如し自習時間もはてぬるほと庭のけしきのなかしけなるにあはれなる蟲の音にもよほされて只一人外面の運動場にあくかれいてゝ池の邊にたゝすみて水底にうつれるかけいとさやかにて萩薄なと露のこぼるゝに枝うち動きて手もふれぬにふと上さまへあかりたるもをかし

常にかゝつらへる學ひの業のこともしはし忘れてうち詠むるほとに忽ち思ひ出たり數學の説てふ宿題を課せられてありける事をさてなかむれは見渡す限り數學てふことにかゝはらぬものこそなけれそこゝに茂れる萩すゝきは更にもいはす名もこと〳〵なる木艸のかす〳〵池水の量地面の廣さ狹さ水の深さ淺ささては秋といひ冬といひ時候のうつりかはりあかねさすひるとぬはたまの夜とのけぢめはた月のみちかけなとおほよそ天地のあひたにありとあらゆるものゝありさまは皆數てふことの考へにあつからさるはあらしかし

そも〳〵數學は自然の法則に基きて眞理を推し究むへき理學にて我等の日頃取行ふ業は皆此理の外ならし其應用も世の常のことにて月日時の經過わたらひの上にては金錢の出納物品の購求消費なとにつきて誰人も生涯なさて叶はぬ事ともになん進みては如何なる學問上にも應用せられて數學の理によらぬものは一つたにあることなしされはあて人の國民の上にたちてよろつおきて行ふにも切要なるへく眼鏡とりて空うち仰きてる月かゝやく星の行方をさぐりまたは千年の後の世のことまてあらかしめ測りて月日のめくり四季のうつりかはり日蝕月蝕なとのありさままて今より知り得る天文學者てふ人々のなす業も亦數理によれるなりけり

されは數學は身を立て家を齊へはた國を治むるに最も要ある學問にて倫理といひ道德といふもそのもとみなこれよりそ起るへき家齊ひて國治る國家の隆盛をいのるものは必らす之を勵まさてやはあるへき

およそ高きもいやしきも算數を知らすして我財祿の限りを考へす妄りに用ゐ盡して困窮に至るも畢竟數理を辨へねはそかし事に臨みて利害を考ふる事も能はすいたつらに身を埋れ木の花さくこともなくてくちはてぬるはいとはかなき我國は古へより廉潔を尊ふ國柄なるにことに武士道てふことの世の習はしとなりてよりは算數といへはまつ應用多き金錢にかゝつらふ事のやうに思ひなして商人をおきてより外はとのみ務め學はさりきされは益軒先生も

日本にては算數はいやしき業なりとて大家の子には教へす是國俗のあやまり世の人の心得違へるなり大人も國郡にあらゆる民數を計りその年の土貢の入を計りて來年出し用ゐる分量を定めされは限りなき欲に從ひ財を費す財盡きぬれは困窮に至るへし是れ算を知らされはなりまた國土の人民の數を計り米穀金銀の多少と軍に人馬の數と糧食とを勘へ道里の遠近と運送の勞費を計り人數をたて軍をやるもみな算數なしらされは行ひ難し臣下に任せてはおろそかにして事違ふゆゑに大人の子は殊に自ら算數をしらてはつとめにうとく事かく事多し是日用の切要なる事にして必習ひ知るへき業なり

といはれたりき封建の世にありても心ある人はかく歎きて勵まされけりまして世界ひろくゆきかひて優れるものは勝ち劣れるものはまくる世の中にありては一きは心すへき事にこそある

今や明けく治る大御代にありては蟲ならねさもかこさかましき此懸念は無德にけたれて數學の世に行はるゝこさのさまは照る月の中天にかゝやくか如くそれもて物事の理を明らむるは池水にうつれる影よりもさやけし

されさもなほこゝにこの懸念をうち捨て得ぬ事こそあれそは世の中には古へよりのならはしの去り難き故にやゝもすれは女子にはさのみ數學の觀れんを有たしむるも益なしさいふものさへありて其天性男子さ異にて感情つよく理想にさもしけれは數學は女子にふさはしからす女子の忌み嫌ふ學科也なさ沙たせらるゝこそいさも〳〵口惜しけれ一國の基さある一家を治むるは誰か任そ有爲の兒を育つるは誰か務そ男子の貴か否さはあらす良妻なり賢母なりされは數學は男子にのみ必要ならし女子にもいさ切要なるわさそかしかくいへはさて元より高尚理論を習ひ覺ねす物ことに口に泡ふきたてゝ議論せよさにはあらすされさもさらてたに情の爲に心うこきやすき女の性なれは數理の如き自然に備はれる眞なるたしかなる動かすへくもあらぬ理想もて物の利害を辨別するこさの習はしなからんにはいかてか情の爲にかりたてられて知らす〳〵困しみの淵にしつまさらんやはいま我等か教を受けなから只師の君の惠の露を受けなから才なくて白玉の光りあらはし得ぬをいおもふに厭はしけなるふしなきのみならす却りて樂しき業さこそ思へかゞはせむ

時しも荻のうは風うよ〳〵さ吹きて蟲の音いさゞかこさかましくさりあつめたる秋のあはれも一層身にしみて覺ゆるほさに上野の鐘のおさ初夜をつけわたれは是も數よさ獨こちつゝ見捨てかたくもいささてふりかへり見れは月はひさり笑めるか如く我影をうつして寄宿舍へさおくりぬ

●きこはまゐらす

一原稿はすべて、書きざま正しかるべし、文字のみだれたる、住所姓名のもれたるはとらず。

一兼題歌文は、ことに變体がなを用ひず、一字々々分明にしるさるべきこと、又歌一首の上に、上の句の中に二こゑの漢字一字を用ひ他はみなかなを用ゐらるべし。

一必半紙を用ひて十六行、二十四字詰なるべきこと。

一毎紙國郡、町村、番地、姓名等つばらかにしるさるべきこと。

一五日兼題は前月廿五日二十日のは、その月の十日までに本社にとゞくやう御出しのこと、遲れたるはとらず。

して、夜も寢ねたりとか。然るに、今は姦邪處を得、小人横行し、欺誣勝を占め、正直は返りて愚弄せらる。昔の社會を組織せるも人民なり。今のも人民なり。同じ人民にして、其の德行の相反すること此の如し。實に澆季の世と云ふべし。日月も光を改めず、草木も同じ緑なれども、人の心の變れること、此の如くなるは、いと〳〵歎しきことなり。此のまゝにして移り行かむには、萬世の後には、如何にかなりなまし。宜しく今の中に之を挽回すべきなり。之を挽回するには、世の人々、此の歌の如く直かれとのみ思ふにあり。

橘枝直

野べに生ふるいさゝむら竹いさゝめも人の爲よき事はかりせよ

野べに生ふるいさゝむら竹とは、三の句のいさゝと云はん爲の序詞にして、歌の意には關係なし。いさゝむら竹とは、小さき竹の群生したるを云ふ。○いさゝめとは、聊の間にてもと云ふに同じ○一首の意は、人たるものは、唯僅の間にても世間公衆の爲に、利益になる善事をなし行ふべき事ぞよとなり。

凡人は、一人にて生活し得るものに非ず。必多くの人と相交らざるべからず。如

何に多才多能なる人なりとも、一人にて家を建て衣を織り食に耕し器具を造らむと欲するも、豈得べけむや。故に必數多の人相集り、各其の職業を分ちて、之を勉め、互に交換して、其の生活を全くする事を得るなり。官吏は、天皇を輔佐し奉りて政治を施し一國の安寧秩序を保ち、農夫は、田畑を耕作して五穀及其の他の物を生産せしめ、工人は、之を種々に利用して衣服其の他必要なる道具器械を製造し、商人は、之を交換して相互の利を計る。故に天下の人、皆飢ゑず寒からずして、豊に生活を全くする事を得るなり。されど人の爲にする事は、即我が爲にする事と知るべし。人の爲に善事をなす時は、我が爲にも亦善なるなり。人の爲に惡事を行ふ時は、我が爲めにも亦あしきなり。人苟我が身の善からむことを願はゞ、人の爲善なる事どかりを行ふべし。而して其の善なる事を行ふには、先貧を憐み窮を救ひ、弱を助け不具を濟ひ、進みて殖産興業の利を計り、通商貿易の益を增さんことを勉むるにあり。之を博愛と云ひて、人の尤も大切なる德なり。世には、往々己の近親の者をれきて、遠疎の者のみを愛するものあれども、先己の近親より始めて、漸次に之を遠疎に及ぼすべきなり。本末を違へ、主客を轉倒

するが如きは、眞の博愛にあらず。能く心すべきことにこそ。

橘千蔭

竹のねの下はひわたるふしの間もけふの日かげをあだに暮すな

一首の意は、竹の根の、土の下を這ひわたれるは、其の節甚みじかきものなり。其の短き根のふしの間の如き一寸の間も、今日の光陰を徒らに暮してはならぬ。必勉強すべきことなりとなり。

人には、勤勉と云ふ事なかるべからず。夙に起き夜に寝ねて勤勉する時は、貧賤も必富貴となる。若、之を怠る時は、富貴も忽貧賤となるなり。勤勉は實に幸福の母と云ふべし。世には明日ありと思ひて、今日を徒に經過する者あれども、日月は一度去りて復歸らず。故に一時の怠は、一生の損となる事を知るべきなり。古人の、一寸の光陰輕んずべからずと云へるは、其の意實に、此にあるなり。凡人の一生は、甚長きが如しと雖も、日月は矢よりも早く速に來りて、忽老人となり、老の時に及びて、後悔すとも詮なきわざなれば、一寸の光陰も徒消する事なく、職を勉め業を勵みて、功を立て名を成すべきなり。萬物の靈と生れて、何事もなす

事なく、禽獸草木と同じ樣に朽ち果ん人は、寧生れざるに如かざるべし。苟人と生れたる甲斐には、其の功なくては叶はざるべし。而して其の功を立つるは、勤勉にあることなれど、竹の根の節の間にも徒に過ぐさぬ樣心がくべし。

源持賢

急がずはぬれざらましを旅人の後よりはるゝ野路の村雨

一首の意は、今もや村雨の降り出でむ空合となりぬれど、旅人は、早く人家のある處まで行かむと思ひて、野路を急ぐ間に、忽雨は降り出でゝ、いたくぬれそぼちたり。然るに旅人の急ぎしあとは、忽雨晴れて晴天となれり。若彼の旅人が急がずありしならむ、村雨にはあはずして、ぬるゝ事もなかりしならんを、餘りに急ぎし故返りてぬれたりとなり。

諺に急げば損すと云へる如く、何事も急ぐべからず。餘りに急ぐ時は、事の成らざるのみならず、返りて損するものなり。大工左官などの如き卑近の業すら、猶七八年の年季を入れて、之を習はざれば、一人前のものとはなりがたし、まして學問事業などに至りては、容易に成就すべきものに非ざるなり。すべて急ぐ時は、

心切にして、思慮十分なる事能はず。思慮十分ならざれど、おのづから過多し、又成功を急ぐ時は、始の間は、能く勤勉すれども、久しきに渡りて、其の成功を見る事能はざる時は、怠屈の念生じて、中途にして之を廢するに至る。非常に勤勉すれど、非常の怠屈の念生ずるは、反動力の止を得ざる處なれど、急ぐことは、速に成功する小事にはよかるべけれど、久しき、年月を要する大事に至りては、決して宜しきものにあらず。されど、大事をなさむと欲するものは、宜しく功を永遠に期すべきなり。

源俊頼

武士の矢ばせの舟は早くとも急がばまはれ瀬田の長橋

武士のとは、矢の枕詞なり。○一首の意は、近江の湖水を渡るに、矢橋より舟に乘りて行く時は早く、瀬田の橋に行く時は遲し。されど急ぐ時は、矢橋より舟に乘る方が早き樣なれども、舟は風吹き波荒るゝ時には、或はあらぬ方へ漂流し、或は水底に沈沒する事などありて危きものなれど、矢張瀬田の長橋へまはりたる方が大丈夫にて、早きものぞとなり。

すべて何事によらず、事は丁寧にせざるべからず、大方の人は、急ぐ時には、成るべく近き手段を以て成さんとするが故に、過を生じて又改めざるべからざる様になりなどして、其の成功に至りては、返りて急がざる人にも遅くるゝものなり、故に大丈夫にして間違のなき方を撰びて、丁寧反復する様に心がくべし。平常に於いては若一度仕損ずる時に、再之を仕直す暇あれども、急ぐ時には其の間なし。故に一しは之を注意して仕損せぬ様、仕直さぬ様に、丁寧にすべきなり。此の歌の急がばまはれと云ふ一句、實に金言と云ふべし。

伴　蒿蹊

末終は海となるべき山水もしばし木の葉の下くゞるなり

一首の意は、行く末遂には茫々洋々たる大海となるべき山水も、山間谿流を流るる間、しばらくは、木の葉の下をくゞりて流るゝなり。然れども次第に大河となり、後には大海となり、其の際涯を知らざる様になる。人も亦此の如し、始は凡俗小人の為に卑下さるゝも、之を忍びて怠らざる時は、遂に大人君子となり天下に名を擧ぐるに至るとなり。

人は忍耐の心を養成せざるべからず。忍耐とは如何なる艱難辛苦にあふとも、堪へ忍びて其の志を達する樣にするを云ふ。人の世に處するには、種々の堪ふべからざる事は、誰もあるべきことなり、或は人の爲に嘲弄せられ、或は罵詈讒謗せられ、或は耻ぢ怒る事あり。或は恨み憤る事あり。然る時に心をまげ身を屈し言を控へ行を押へて、之を堪へ忍び、人と爭はず物に逆らはずして、恰も木の葉の下を水のくゞる如くしてあるべきなり。小事を爭ひ細物を競ふが如きは、大人君子のせざる所、英雄豪傑の潔しとせざる所なり。天の大人君子英雄豪傑となさんとする前には、必禍を下して之を試む。其の時に至りて、決して屈撓挫折することなく、益奮發精勵して、難を排し苦を開き、以て、其の事を成就する時は、必非凡の人となり、名を天下に擧ぐ、恰も大海の洋々として其の畔岸を知らざるが如きに至る。而して其の忍耐の精神を養ふには、己の尤堪へ難しとする事より始むるをよしとす。己の尤難しとする事に堪ふるに至る時は、萬事萬物忍耐する事能はざるものなきに至る。然る時は、難に臨み變にあひても、之を忍耐するに容易になり、遂に其の事を成就することを得べし。諺にも短氣は損氣と云へる如く、

忍耐の心なきものは、何事もなす事能はざるのみならず、常に損失することのみありて、身を立て世に處することも覺束なきに至るものなり。

素性法師

底ひなき淵やはさわぐ山河の淺きせにこそあだ浪は立て

底ひなきとは、淵の深くして、底も知れざることを云ふ。○一首の意は、底の知れざる様なる深き淵は、常に騒ぎて波の立つことはなし。山河の淺き瀬は、水が深からぬ故に、常に波が立ちて騒がしとなり。即人も此の如く、深謀遠慮ありて、度量の廣大なるものは、常に沈着にして輕騒なる事はなけれど、山川の如く知識淺薄なるものは、心沈靜ならずして常に騒がしきなり。

人は度量を廣大にせざるべからず。度量廣大なる時は、左右廣くして障る事なく、前後遠くして塞ることなし。天下の物入り來れども逆はず、千萬の事寄り集れども溢れず。心常に悠々として、氣長に平和なり。されど事に臨みて爭ひ怒ることなく、物を處して偏し僻る事なし。心を用ゐる事少しくして嚴しき時は、物にさかひ爭ひて破る。古人曰はく、心は小ならむことを欲し、膽は大ならむことを欲

すと。膽は即度量なり、度量は成るべく大ならざれば、事業成りがたけれども、心は翼々として愼まざるべからず。如何に膽のみ大なりとも、謹愼を以てせざる時は、粗暴に渡りて事業成らず、故に膽のみ大にして、小心翼々ならざる人は、英雄の如くして英雄に非ず。畫きたる虎の、猫に似たるが如し。英雄は實に小心翼翼として、萬事に心を用ゐ、萬物に氣を配り、而して其の膽の大なる事、斗の如し。人は須らく此の如くなるべし。人は天地の靈なり。天地は限る處なし、人の性何ぞ之に異なる事あらむ。既に天地の際りなきが如く、宏大無邊なる度量ならむには、喜怒之にさはらずして、事々塞る事なし。僅々の事にも目を瞋し、小々の物にも口を尖らして、詰責咎問するが如きは、實に度量の狹小なるものなり。さる人は、常に齷齪として小事の爲に心を苦しめられ、遂に大事業は成すことなし。人たるもの宜しく之を慮るべきなり。

凡河内躬恒

世をすてゝ山に入る人山にても猶うき時はいづち行くらむ

一首の意は、此の世の中の人を見るに、種々なる憂苦にあひ、世を捨て出家とな

りて、山の中に入る人の多くあるが、若、其の山の中にても、猶憂苦に思ふ事のあらむ時には、何の處に行くならむ。たとひ山に入りても、憂き時は憂かるべし。憂しとて外に行く處もなかるべけれど、山に入らざるも同じ事なるべしとなり。世には、一事業に從事して、終身其を以て身を立て、名を成さんと思ひ、始の間は、能く一心不亂になりて勉强すれども、追々艱難辛苦にあひ、憂愁に堪へざる時は、之を捨てゝ他に轉ずるものあり。是大なる誤なり。すべて世の中の事、一喜一憂相伴なはざるはなし。大喜あるには大憂從ふ。故に大喜を得んとするには、是非とも大憂を凌がざるべからず。大憂を凌ぐ事能はざれど、大喜は得がたし。然るに大憂堪へがたしとて、此を去りて彼に行き、彼を棄てゝ他に行かど、終身大喜には逢はずして止むなり。萬の事皆然らざるはなし。世を憂しとて、之に堪ふること能はず、之を捨てゝ山に入りたりとも、などか憂のなからざらむ。憂ありとて山をすてゝ他に行かんと欲せど、又世に出づるより外はなし。寧世を捨てざるに如かざるなり。人の富貴貧賤は天命なれど、其の天命に安んずる時は、其の過不過に係はらず、富貴となるべきは、富貴となり、貧賤となるべきは、貧賤と

なるなり。貧賤となりても、天命と思ひ勉強すれど、生活を得ぬ事なし。貧賤を憂しつらしとて、天命に逆ひ、己が身に生れつかぬ幸福を得んと欲し、此を去り彼を捨て、浪々として定る所なからんには、啻に幸福を得る事能はざるのみならず、生活も出來ぬ樣になりぬべし。故に、人は、何事も其の身に生れえし天命と思ひて、一心不亂になりて、其の事に從事すべきなり。

惟喬親王

天雲のたえずたなびく峯にだに住めはすみぬる世にこそありけれ

一首の意は、金殿玉樓の中に住みて居ても、矢張不足に思ふ事のあるものなれど、此の如く、天雲の絶ゆる間もなくたなびける峯などには、決して人は住まれぬものならんと思ひしに、左にはあらずして、かゝる處にも、矢張住みて見れど、住みて居らるゝものよとなり。

九重雲深き處、金殿玉樓の中に成長し給へる親王の御身にても、既に此の歌の意の如し。況んや草莽の臣に於いては、如何なる處にても、住みえぬ人のあるべしやは。すべて、人は誰にても、飽食暖衣を好まざる人はなかるべけれど、驕奢の

心は窮りなく、隴を得て蜀を望むは、免れざる人情なれども、其の飽くことを知らざるは、禽獸の心なり。如何に驕奢を極めて、山海の珍味、綿繡の衣服、金玉の殿宇、何一つとして不足なきも、食は腹に滿つるに過ぎず、衣は身に纏ふに過ぎず、家は五尺の身を容るゝに過ぎざるべし。如何に貧賤なりとて、腹に滿つる食暖を取る衣、身を容るゝ家は有するなり。而して珍味も常に食すれど、甘からず。綿繡も常に着すれど、暖ならず。金殿玉樓も常に居れど美ならず。其の甘暖美は、苦寒惡の中にありて、始めて之を知る事を得るものなり。されど、其の常になる時に於いては、富貴貧賤も心の中に差別を覺ゆる事なかるべし。歡樂愉快なる事は、富貴よりも返りて貧賤に多きものぞかし。材力は限ありて、驕奢は窮なきものなれど、住めど住みぬる世の中と思ひて、誰も其の分に安んずべきなり。

讀人知らず

手枕のすきまの風も寒かりき身はならはしの物にぞありける

一首の意は、昔富貴にありし世には、手枕のすき間より、吹き入るほどの、僅なる風も寒しと思ひしに、今は貧賤になりて、漸く生活するほどの身となりぬれど、

文部省檢定濟

小學校教科用書目

伯爵副島種臣閱

伯爵東久世通禧著

書名	冊數	定價
尋常小學修身書	全四冊	定價金三十四錢
仝　教師用	全四冊	定價金八十四錢
高等小學修身書	全四冊	定價金四十錢
仝　教師用	全四冊	定價金壹圓
仝　教場用掛圖	兩面二十枚	定價金三圓
尋常修身書字解	全一冊	定價金十二錢
高等修身書字解	製本中	
尋常小學國史談	全二冊	定價金廿錢
高等小學國史	全三冊	定價金五十七錢
尋常小學讀本	全八冊	定價金六十六錢
高等小學讀本	全八冊	定價金壹圓廿九錢

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地（電話一九四六）　國光社

女鑑第九十六號目錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊(三ヶ月分)	十二冊(半年分)	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十八年十一月四日印刷
同 年十一月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人 川崎直衛
同
編輯人 山根勇藏
同
發行所(電話番號一九四六) 國光社

(印刷所 東京國光社印刷部)

明治二十四年八月八日內務省許可